

小郡若山遺跡 9

小郡市文化財調査報告書第 344 集

2022

小郡市教育委員会



<序 文>

本書は小郡若山遺跡9次調査の発掘調査報告書です。本遺跡ではこれまでに8次の調査が実施され、弥生時代から奈良時代にかけて集落が営まれていたことが分かっています。

国指定史跡小郡官衙遺跡とも近接しており、本調査でも奈良時代の建物跡を確認しました。主軸方向から小郡官衙遺跡第Ⅱ期と同時期の2×2間の総柱建物がみられます。弥生時代の集落では、中期集落だけでなく、後期の集落も確認でき、小郡・大板井遺跡群の後期環濠集落の南東方向への広がりを確認できました。

調査にあたりましては、関係諸機関、周辺住民の皆様、そして現地作業にあたった地元作業員の皆様などのご理解とご協力をいただきました。記して感謝を申し上げ、序文といたします。

令和4年3月31日

小郡市教育委員会 教育長 秋永 晃生

<例 言>

1. 本書は、令和元年度に行った小郡市小郡に所在する「小郡若山遺跡9」の発掘調査記録である。
2. 発掘調査は、国庫補助を受けて、小郡市教育委員会が実施した。
3. 調査期間は、令和元年12月24日から令和2年2月28日まで実施した。調査面積は、152㎡である。
4. 遺構の実測は担当者と一木賢人、川波重衣（福岡大学生）が実施し、遺物の実測は久住愛子、担当者が行い、デジタルトレースは、宮崎美穂子が行った。遺物の洗浄・接合は佐々木智子・永富加奈子・山川清日・牛原真弓が行い、遺物の写真撮影は（有）システム・レコに委託した。
5. 鉄製品のエックス線 CT 撮影は九州歴史資料館の協力を得た。
6. 本書中の方位は座標北を示し、図上の座標は国土座標第Ⅱ系（世界測地系）に拠る。
7. 本書で用いた標高は、東京湾平均海水面（T. P.）を基準とした。
8. 本書で用いた略号は、竪穴住居跡：SC 掘立柱建物跡：SB 土坑：SK 甕棺墓：ST 溝：SD
である。
9. 遺物・実測図・写真は、小郡市埋蔵文化財調査センターにて保管・管理している。
10. 本書の執筆と編集は山崎頼人が行った。
11. 報告書の作成にあたっては、多くの方からご指導頂いた。感謝の意を表する。

久住猛雄（福岡市文化財活用部）、小林啓（九州歴史資料館）、武末純一（福岡大学）、
林大智（石川県埋蔵文化財センター）、真鍋成史（交野市教育委員会）、村上恭通（愛媛大学）

<目次>

第1章	調査の経過と組織	1
1.	調査に至る経緯	1
2.	調査の経過	1
3.	調査組織	1
第2章	位置と環境	2
第3章	調査の成果	5
1.	調査の概要	5
2.	弥生時代の遺構と遺物	5
3.	奈良時代の遺構と遺物	21
第4章	調査成果のまとめ	25

<挿 図・表 目 次>

第1図	小郡若山遺跡周辺の既往発掘調査区(s=1/10,000)	3
第2図	小郡若山遺跡9全体図(s=1/100)	6
第3図	1号住居跡 実測図(s=1/50)	7
第4図	3・4号住居跡 実測図(s=1/50)	8
第5図	1・3・4号住居跡出土土器実測図(s=1/4)	9
第6図	2号土坑 実測図(s=1/20)	11
第7図	2号土坑出土土器実測図①(s=1/4)	12
第8図	2号土坑出土土器実測図②(s=1/4)	13
第9図	3号土坑 実測図(s=1/20)	14
第10図	3号土坑出土土器実測図①(s=1/4)	15
第11図	3号土坑出土土器実測図②(s=1/4)	16
第12図	1号甕棺墓 実測図(s=1/20)	17
第13図	1号甕棺 実測図(s=1/4)	19
第14図	小郡若山遺跡9出土石器・土製品・ガラス製品・鉄器実測図(s=1/1,1/2)	20
第15図	1号掘立柱建物 実測図(s=1/60)	22
第16図	1・2号横列 3号掘立柱建物 実測図(s=1/60)	23
第17図	1号土坑 実測図(s=1/40)	24
第18図	小郡若山遺跡・小郡中尾遺跡・大板井遺跡出土初期鉄器(s=1/2)	27
第1表	小郡遺跡・小郡官衙遺跡の既往調査の整理	2
第2表	小郡若山遺跡9出土遺物観察表	29

<図 版 目 次>

- 図版 1 小郡若山遺跡9 調査区全景(上空から) 小郡若山遺跡9 調査区全景(北上空から)
- 図版 2 小郡若山遺跡9 調査区付近(上空から) 調査地から小郡官衙遺跡公園を望む(南東方向)
- 図版 3
- | | |
|------------------------|-------------------------|
| ① 1号住居跡土層断面(南西から) | ② 1号住居跡土層断面(南東から) |
| ③ 1号住居跡中央土坑土層断面(南東から) | ④ 1号住居跡焼土横土坑土層断面(西から) |
| ⑤ 1号住居跡屋内土坑土層断面(北東から) | ⑥ 1号住居跡屋内土坑土器出土状況(北から) |
| ⑦ 1号住居跡ガラス小玉①出土状況(東から) | ⑧ 1号住居跡ガラス小玉③④出土状況(東から) |
- 図版 4
- | | |
|-----------------------|-----------------------|
| ① 1号住居跡(北西から) | ② 1号住居跡西側ベッド状遺構(北西から) |
| ③ 1号住居跡西側ベッド状遺構(南東から) | ④ 西側ベッド状遺構土器出土状況(北から) |
| ⑤ 1号住居跡東側ベッド状遺構(西から) | ⑥ 1号住居跡床面検出状況(南東から) |
| ⑦ 1号住居跡完掘状況(北西から) | ⑧ 1・3・4号住居跡(北東から) |
- 図版 5
- | | |
|----------------------|---------------------|
| ① 3号住居跡土層断面(北西から) | ② 3号住居跡(西から) |
| ③ 3・4号住居跡の先後関係(北東から) | ④ 北西側遺物出土状況(南から) |
| ⑤ 鉄ヤリガンナ出土状況(南から) | ⑥ 4号住居跡土層断面(南西から) |
| ⑦ 1・3号住居跡の先後関係(北東から) | ⑧ 3・4号住居跡の先後関係(東から) |
- 図版 6
- | | |
|---------------------|---------------------|
| ① 1号土坑土層断面(東から) | ② 2号土坑土層断面(北西から) |
| ③ 2号土坑遺物出土状況(東から) | ④ 2号土坑遺物出土状況(南西から) |
| ⑤ 3号土坑土層断面(南東から) | ⑥ 3号土坑遺物出土状況1(南から) |
| ⑦ 3号土坑遺物出土状況2(南西から) | ⑧ 3号土坑遺物出土状況3(北西から) |
- 図版 7
- | | |
|--------------------|--------------------|
| ① 1号甕棺土層断面(南東から) | ② 目貼り粘土土層断面(南東から) |
| ③ 1号甕棺検出状況(南東から) | ④ 目貼り粘土詳細(南東から) |
| ⑤ 1号甕棺検出状況(南から) | ⑥ 1号甕棺下壘立割状況(南東から) |
| ⑦ 1号甕棺上下棺検出状況(南から) | ⑧ 1号甕棺内部状況(南東から) |
- 図版 8
- | | |
|-------------------------|-------------------------|
| ① 1号掘立柱建物(北西から) | ② 1号掘立柱建物(北東から) |
| ③ S B 01 p 1 土層断面(西から) | ④ S B 01 p 2 土層断面(南西から) |
| ⑤ S B 01 p 3 土層断面(北東から) | ⑥ S B 01 p 4 土層断面(北東から) |
| ⑦ S B 01 p 5 土層断面(南東から) | ⑧ S B 01 p 6 土層断面(北から) |

- | | | |
|------|---|--|
| 図版9 | ①SB 01 p 7 土層断面(東から) | ②SB 01 p 8 土層断面(南東から) |
| | ③SB 01 p 9 土層断面(南東から) | ④SA 01 p 1 土層断面(南から) |
| | ⑤SA 01 p 2 土層断面(北から) | ⑥SA 02 p 1 土層断面(西から) |
| | ⑦SA 02 p 2 土層断面(西から) | ⑧SA 02 p 3 土層断面(西から) |
| 図版10 | 1～3号住居出土土器 | 2号土坑出土土器 |
| 図版11 | 2・3号土坑出土土器 | |
| 図版12 | 3号土坑出土土器
土製投弾 (SB 01・SC 03・SC 04 出土) | 1号甕棺 (上・下棺) |
| 図版13 | 泥窯片 (SC 03 出土)
砥石 (SC 01 出土) | 石庖丁 (SC 01・SK 03 出土)
黒曜石石核 (ST 01 出土) |
| 図版14 | ガラス小玉 (SC 01 出土)
柄付き鉄製ヤリガンナ (SC 03 出土) | 粘土滓 (SC 01 出土) |
| 図版15 | 柄付き鉄製ヤリガンナX線CT画像 (SC 03 出土) | |

第1章 調査の経過と組織

1. 調査に至る経緯

本発掘調査は9次調査となる。平成30年1月24日付で照会文書(事前審査番号17145)が提出され、2月2日に申請地の試掘調査を実施した。その結果、開発予定地に弥生時代と奈良時代の遺構が存在することが明らかになった。これにより、建設前に発掘調査が必要な旨を伝え、その後協議を重ねた。協議の結果、住宅建設部分152㎡の調査を実施することになり、発掘調査は令和元年度国庫補助事業として行った。現地の発掘調査は令和元年12月24日に開始し、令和2年2月28日に終了した。

2. 調査の経過

調査日誌より抜粋し、調査経過を記す。

2019年12月24日 表土剥ぎを行う。

12月25日 人力掘削開始。住居数軒、掘立柱建物数軒、土坑数基、周溝状遺構1を検出。

1月6日 竪穴住居とそれを切る掘立柱建物の切り合いを確認して掘立柱建物から掘削開始。大原小中学生3名ほか見学。

1月17日 竪穴住居の掘削を開始。

1月24日 SC01よりガラス小玉の出土。

1月28日 SC01よりガラス小玉3点の出土。周辺の土壌をふるいにかけるようにする。

2月5日 小児棺の掘削を始める。

2月17日 初雪、寒波襲来。

2月18日 小郡官衙遺跡を守る会の方7名来跡、説明。

2月19日 空掘、ただし、霜柱がひどく、それを朝一番で取り除く作業を行った。

2月20日 住居の貼り床を掘削、切り合う住居も追調査。

2月21日 大原小学校3年生見学。

2月28日 埋め戻し、調査完了。

3. 調査組織

[令和元年度調査 令和3年度整理作業]

小郡市教育委員会	教育長	清武 輝	(令和元年9月まで)
		秋水 晃生	(令和元年10月から)
	教育部長	黒岩 重彦	(令和2年3月まで)
		山下 博文	(令和2年4月から)
文化財課	課長	柏原 孝俊	
	係長	杉本 岳史	
	技師	山崎 頼人	[調査・報告書作成担当]

第2章 位置と環境

本遺跡は筑後平野と福岡平野を繋ぐ二日市地狭帯の南側にあたり、九千部山に連なる基山の東側に広がる独立丘陵である三国丘陵から下った、小郡市中部に広がる段丘上に位置する。遺跡の南側を築地川が南東方向へ流れており、小郡市を南北に貫流する宝満川へと注ぐ。

小郡若山遺跡の東側には、小郡官衙遺跡（小郡遺跡）、大板井遺跡が展開している。また、小郡若山遺跡の南西にある若山堤の対岸には小郡中尾遺跡が広がっている。

小郡若山遺跡の調査はこれまで8次にわたって行われており（第1図）、既往の調査をまとめておく。

1次調査は、昭和63年2月8日に市道小郡東町3251号線の道路改良工事中に遺跡が発見され、それを受けて市都市建設部建設課と協議して計画地内の試掘を2月17日に行い、遺跡が存在する部分の調査を2月22日から行った。調査面積は市道幅4m、600m程であったが、弥生時代中期頃から後半の住居跡3軒、土坑10基、溝4条ほかを検出した。飛鳥から奈良時代の住居跡8軒、土坑1基を確認した。

2次調査は、平成2年度にアパート建設に伴って474㎡の調査を実施し、弥生時代中期中頃の土坑1基、7世紀後半代の土壇墓2基が検出された。

3次調査は、平成4・5年度に小郡カトリック教会修道院建設に伴い調査が進められた。平成5年3月1日から調査を開始し、調査途中の4月1日に多鉦細文鏡が出土したため、小郡市埋蔵文化財調査指導委員会専門部会を招集し、4月6日に現地視察と審議が行われ、遺跡の性格を確実に把握するために発掘調査範囲の拡張を行うことになった。追加調査は4月19日から始め、5月19日に完了した。拡張区では多鉦細文鏡と同時期（須玖I式）の竪穴住居跡3軒を検出し、当調査地が集落の一角であることが判明した。

4次調査は、平成6年度に小郡官衙遺跡北側の遺構分布状況の確認を目的として、市営若山住宅内の3か所の公園を調査対象として合計90㎡の確認調査を行った。小郡官衙遺跡の北方区画溝(SD851)の延長を確認している。

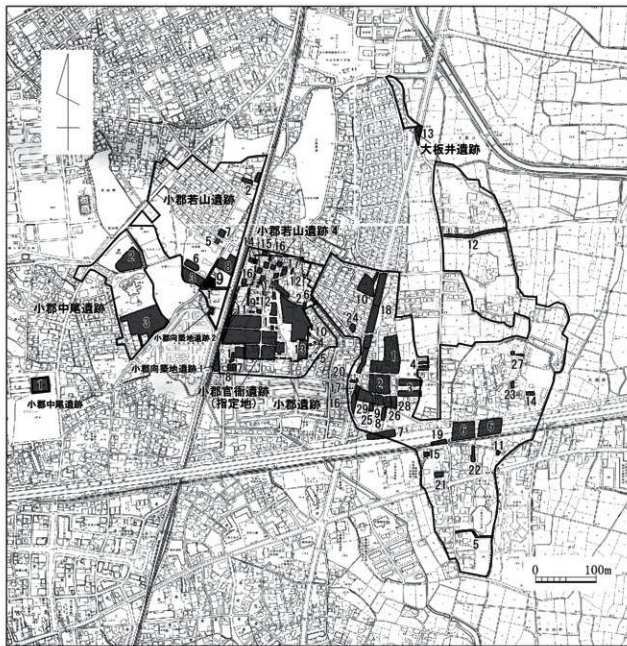
5次調査は、平成9年度に3次調査の弥生時代関連遺構の確認を目的に公園内の調査(120㎡)が行われた。弥生時代中期前葉の掘立柱建物2棟と中世ほかの土坑が検出された。

6次調査は、平成12年度に小郡カトリック教会建設に伴って520㎡の調査を行った。弥生時代中期（須玖I～Ⅱ式（古））の集落と7世紀中頃から後半にかけての集落が検出された。弥生時代の集落では住居跡2軒、祭祀土坑等の土坑5基、7世紀代の集落では、竪穴住居跡4軒、土坑2基、溝1条を検出した。弥生時代中期（須玖I式～Ⅱ式（古））の3号住居跡中央土坑内からは鋳造鉄斧が出土している。

7次調査は、平成12年度の個人住宅建設に伴い国庫補助事業で83㎡の調査を行った。時期不詳の

第1表 小郡遺跡・小郡官衙遺跡の既往調査の整理

調査次数	地点	期間	面積	調査原因	主な検出遺構	報告書
第1次	小郡遺跡1	1987・8・11～10・31	4700㎡	土地造成	Ⅰ期倉庫、Ⅱ期東方官衙跡、Ⅲ期東方官衙跡、Ⅲ期長方形区画	『小郡遺跡』
第2次	小郡遺跡1	1988・4・25～5・24	1500㎡	土地造成	Ⅲ期東方官衙跡、Ⅲ期長方形区画	『小郡遺跡』
第3次	小郡遺跡1	1988・7・10～8・12	2800㎡	土地造成	Ⅰ期倉庫、Ⅲ期西方官衙跡、Ⅲ期北方倉庫群	『小郡遺跡』
第4次	小郡遺跡1	1970・12・10～12・23	800㎡	土地造成	Ⅲ期西方官衙跡	『小郡遺跡』
第5次	小郡遺跡2	1987・11・7～1988・1・16	1500㎡	住宅宅地・駅前緑地	Ⅲ期北方倉庫群	『小郡遺跡』
第6次	小郡遺跡3	1988・2・1989・2	内容確認	Ⅲ期の区画溝(方2軒)、Ⅲ期長方形区画(塀地)	『小郡遺跡集』	
第7次	小郡若山遺跡4	1995・11・10～1・27	90㎡	重要遺跡確認調査	Ⅲ期S8450の一部	『小郡官衙遺跡調査1』
第8次	小郡遺跡4	1996・2・2～1996・2・27	90㎡	重要遺跡確認調査	Ⅲ期S8650東側部5分	『小郡官衙遺跡調査1』
第9次	小郡遺跡5	1997・1・20～1997・2・27	225㎡	重要遺跡確認調査	Ⅲ期農業集	『小郡官衙遺跡調査1』
第10次	小郡遺跡6	1998・1・19～1998・3・19	12㎡	重要遺跡確認調査	長巻倉	『小郡官衙遺跡調査1』
第11次	小郡遺跡7	1999・3・2～1999・3・12	80㎡	個人住宅	弥生時代遺構	『埋蔵文化財調査報告書4』
第12次	小郡遺跡15	2001・3・12～2001・3・27	123.8㎡	重要遺跡確認調査	Ⅲ期東方官衙跡の一部	『小郡官衙遺跡調査2』
第13次	小郡遺跡9	1999・9・23～1999・9・28	206.1㎡	駐車場造成	Ⅲ期長方形区画跡	『小郡官衙遺跡調査2』
第14次	小郡遺跡10	1999・9・29	3.3㎡	駐車場造成	遺跡集約、遺構埋平	『小郡官衙遺跡調査2』
第15次	小郡遺跡11	2000・2・22～2000・1・16	180㎡	下水道工事	Ⅰ期の溝、Ⅲ期西方官衙群跡	『小郡遺跡11・12・13』
第16次	小郡遺跡12	2002・11・18～2003・2・11	190㎡	下水道工事	Ⅲ期長方形区画跡	『小郡遺跡11・12・13』
第17次	小郡遺跡13	2005・7・19～9・7	1104㎡	宅地造成	Ⅲ期区画内、北方倉庫群関連の空間か	『小郡遺跡11・12・13』
第18次	小郡遺跡14	2007・9・18～11・11	298㎡	重要遺跡確認調査	Ⅲ期長方形区画内、Ⅲ期区画溝	『小郡遺跡14・15・16・17』
第19次	小郡遺跡15	2009・3・12～2001・3・27	123.8㎡	重要遺跡確認調査	Ⅲ期東方官衙跡内	『小郡遺跡14・15・16・17』
第20次	小郡遺跡16	2009・6・11～8・26	204㎡	重要遺跡確認調査	Ⅲ期長方形区画内	『小郡遺跡14・15・16・17』
第21次	小郡遺跡17	2010・5・11～6・4	182㎡	重要遺跡確認調査	Ⅲ期長方形区画内	『小郡遺跡14・15・16・17』
第22次	小郡官衙遺跡1	2014・6・9～8・15	238㎡	重要遺跡確認調査	掘エリアⅡ区画跡2棟・Ⅲ期建物1棟	『小郡官衙遺跡』



第1図 小郡若山遺跡周辺の既往発掘調査区 (s = 1/10,000)

溝4条が調査された。

8次調査は、平成26・27年度に個人住宅6軒分の調査(合計510.39㎡)を国庫補助事業で行った。弥生時代中期の竪穴住居跡2軒、祭祀土坑を含む土坑15基、小児甕棺墓1基、周溝状遺構3基、溝状遺構5条ほかを検出した。

隣接する小郡官衙遺跡では、これまでに22次の調査が行われている。これまでの調査では遺跡名が錯綜しており、保存管理計画で国指定史跡小郡官衙遺跡の保護が必要な部分について検討し、「小郡官衙遺跡」の包蔵地を更新した。小郡若山遺跡4も「小郡官衙遺跡」に包括される。

弥生時代の小郡若山遺跡は周辺の小郡遺跡、小郡中尾遺跡、大板井遺跡を合わせての遺跡群として評価し、その変遷や構造を明らかにする必要があり、奈良時代では、推定御原郡衙である小郡官衙遺跡周辺の様相を明らかにできる遺跡である。

[参考文献]

- 小郡市教育委員会 1989 『小郡若山遺跡・干潟遺跡Ⅱ』 小郡市文化財調査報告書第57集
小郡市教育委員会 1990 『小郡若山遺跡Ⅱ』 小郡市文化財調査報告書第69集
小郡市教育委員会 1994 『小郡若山遺跡3』 小郡市文化財調査報告書第93集
小郡市教育委員会 1998 『小郡官衙周辺遺跡1 (小郡若山遺跡4・5)』 小郡市文化財調査報告書第128集
小郡市教育委員会 2001 『小郡若山遺跡6』 小郡市文化財調査報告書第159集
小郡市教育委員会 2015 『埋蔵文化財調査報告書7 - 平成25年度国庫補助事業 市内遺跡調査報告書 - (小郡若山遺跡7)』 小郡市文化財調査報告書第228集
小郡市教育委員会 2017 『埋蔵文化財調査報告書9 - 平成26・27年度国庫補助事業 市内遺跡調査報告書 - (小郡若山遺跡8)』 小郡市文化財調査報告書第310集

第3章 調査の成果

1. 調査の概要

本遺跡はこれまでに8次の調査を実施している。周辺でも確認されている弥生時代集落と奈良時代集落に伴う遺構が確認された。

奈良時代の総柱建物は、主軸方向から小郡官衙遺跡第Ⅱ期と同じ時期の可能性がある。その他、長方形の掘り方を持つ柱穴が確認されたが、削平を受けており残存はわずかであり、調査区内では建物を復元するには至らなかった。そのため、柱列として報告している。

弥生時代の集落は、中期の住居跡だけではなく、後期の住居跡も確認でき、小郡・大板井遺跡群の後期環濠集落の北東方向への集落域の広がりを確認できた。

検出した遺構は、弥生時代中期の住居跡2軒、祭祀土坑2基、周溝状遺構1基、小児棺1基、後期の住居跡1軒、弥生時代の掘立柱建物1棟、奈良時代の掘立柱建物1棟、柱列2列、土坑1基等であった。大きく、弥生時代の遺構と奈良時代の遺構に分けて報告する。

なお、出土遺物の詳細については遺物観察表を参照して頂きたい。

2. 弥生時代の遺構と遺物

(1) 住居跡

1号住居跡 (第2・3図、図版3)

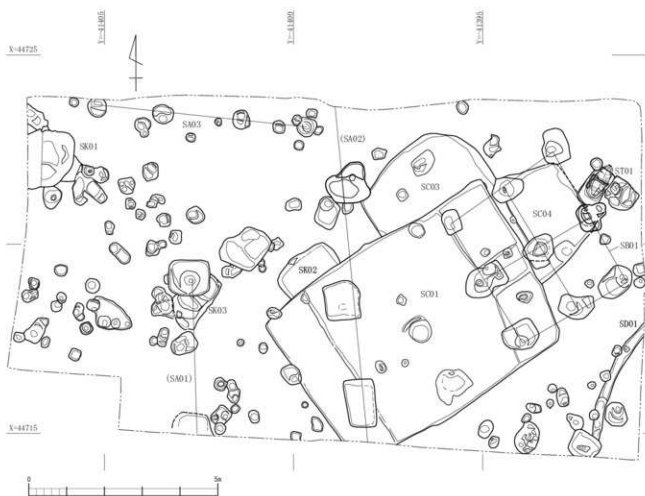
調査区中央から東側、標高182mで検出した。1号掘立柱建物、2号欄列より先行し、3・4号住居、2号土坑に後出する。南隅部分は調査区外に及ぶ。長軸7m×短軸5.05mの長方形を呈し、検出面からの深さは25cm程度である。長軸方向は北東―南西である。埋土は下層に灰黄褐色粘質シルト～ぶい黄褐色シルトがみられ、焼土粒や黄褐色粘土ブロックを含んでいる。上層では暗褐色シルト～褐色粘質シルトが堆積している。

炊辺にはベッド状遺構を持ち、東辺では中央部分をあけて二つに分かれている。西辺は地山削り出しのベッド状遺構である。東側は3・4号住居と重複しているため、地山削り出しが出来ず、盛土整形になったものと思われる。ベッド状遺構の床面からの高さは10cm程度である。4～8cm程度の貼床が施されており、炉の周辺は固く締まっている。中央に直径60cm、深さ12cm程度の円形の炉を持っており、北西側は炉堤状の5cm程度の高まりを残している。埋土は灰褐色土にぶい褐色粘質土ブロック(2cm大以下)、焼土粒や炭の小片が少量入っている。支柱はその炉跡を挟んで2本かと思われる。北西側は長軸35cm×短軸25cm、深さ32cmの柱穴(P1)が確認できる。南東側は1号掘立柱建物の柱穴2と重複する位置にあると考えられ、その下層でピット状に一段下がる部分がみられた(P2)。炉の南東側には1m×0.95m、深さ20cmの不整形の屋内土坑(SK01)がみられ、弥生土器壺下半部(2)、壺底部(5)が出土した。埋土は黒褐色粘質土でぶい褐色粘質土ブロック1cm大が入る。壁際には焼土の塊が南西辺と北西辺に2か所みられた。北西辺の焼土横の小土坑(SK02)は45cm×35cm、深さ16cm程度で埋土は灰褐色粘質土にぶい褐色粘質土ブロック2cm以下、炭小片がわずかに入る。

炉の北東側の床面直上や床面付近の埋土中からガラス小玉5点の出土を確認した。ガラス小玉の出土を確認後、周辺の土をふるいにかけたが、新たには見つからなかった。また、南西のベッド状遺構の縁付近で床面に近い埋土中から土器が数点出土した。

出土遺物 (第5・14図、図版10・13・14)

弥生土器壺口縁部(第5図1)、弥生土器壺口縁部～胴部、胴部～底部(2)、弥生土器台付鉢(3)、弥生土器壺頸部～体部(4)、弥生土器壺底部(5)、手づくね土器鉢(6)が出土した。壺口縁部(1)は、西南辺ベッド状遺構の土器③から出土した。弥生土器壺(2)は西南辺ベッド状遺構の土器①とSK01土器①、およびSC01埋土下層が接合した。上半と下半は、直接は接合しないが同一個体と考えられる。底部はレンズ状となっている。台付鉢(3)は西南辺ベッド状遺構の土器④、壺底部(5)はSK01の土器②の位置から出土した。屋内土坑SK01土器①(壺下半部)と2.6m離れたベッド状遺構の土器③(壺上半部)が接合し、周辺の土器群とともに住居廃絶時の状況が看取できる。



第2図 小郡若山遺跡9全体図 (s = 1/100)

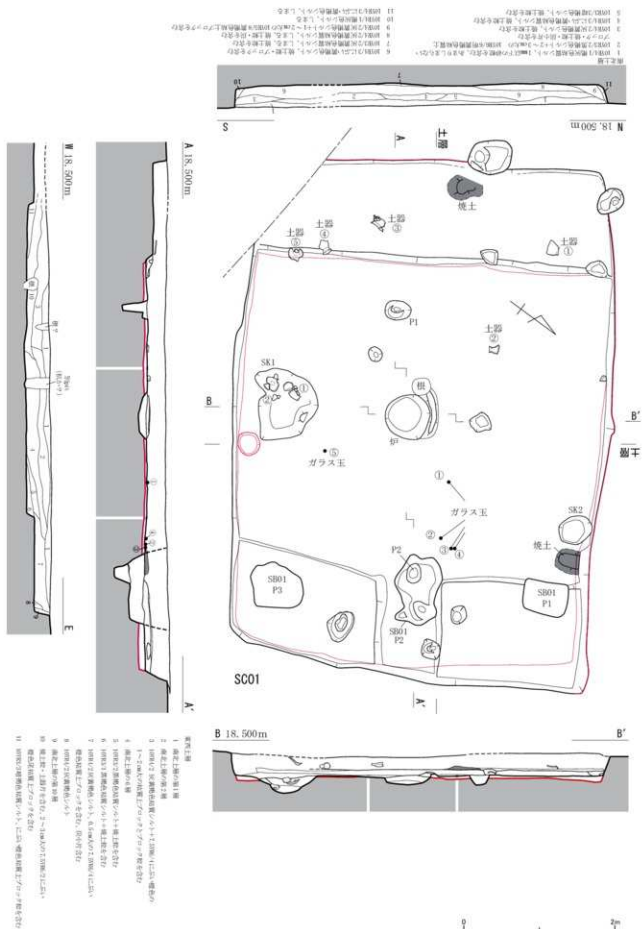
他に、董青石ホルンフェルス製石庖丁（第14図2）、粘板岩製砥石（4）、ガラス小玉（8～12）が出土した。石庖丁は左の粗孔部で破損している。A・B面共に中央部には粗研磨面を残している。刃こぼれが観察できる。砥石（4）は、上端部が緩やかにカーブして厚みを減じている。右側と下端を破損しているが、現状で表面と左側面が研磨されている。裏面は左側面端部では研磨面が確認できるが、うすく剥離している。左側面に摺り切り痕跡がまた。表面全体的に黒みがあり、側面には黒色物質が一部付着している。板石硯の可能性も考えたが、硯の使用痕はなく、平行する擦痕が数単位あり、砥石の可能性を考える。ガラス小玉（8～12）は色調淡青色（青銅着色）で、引き伸ばし技法によって成形されている。また、焼粘土塊片が埋土から282g分出土した。

そのほか、粘土滓かと思われるもの（図版14）、磨石片、黒曜石剥片、軽石片が出土した。粘土滓は長さ2.78cm、幅2.21cm、厚さ1.82cmである。

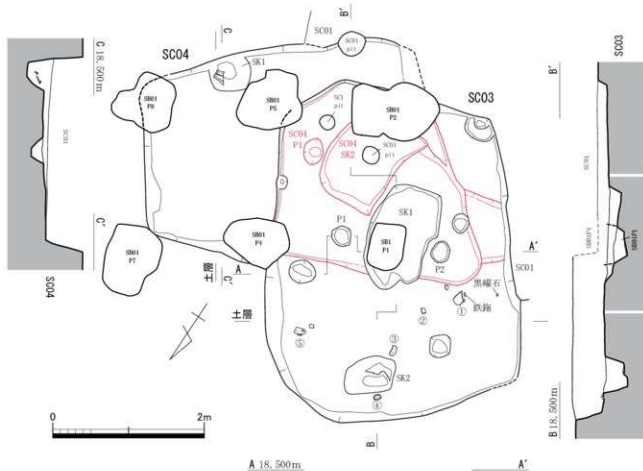
2号住居跡：欠番

3号住居跡（第2・4図、図版5）

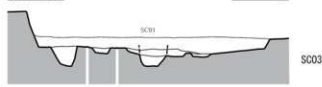
調査区東側、標高182mで検出した。1号掘立柱建物、2号櫓列、1号住居より先行し、4号住居に後出する。長軸4.53m×短軸3.38mの小判形を呈し、検出面からの深さは42cm程度である。長



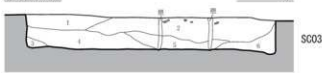
第3図 1号住居跡 実測図 (s = 1/50)



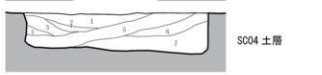
A 18. 500m A'



E 18. 500m W



N 18. 500m S



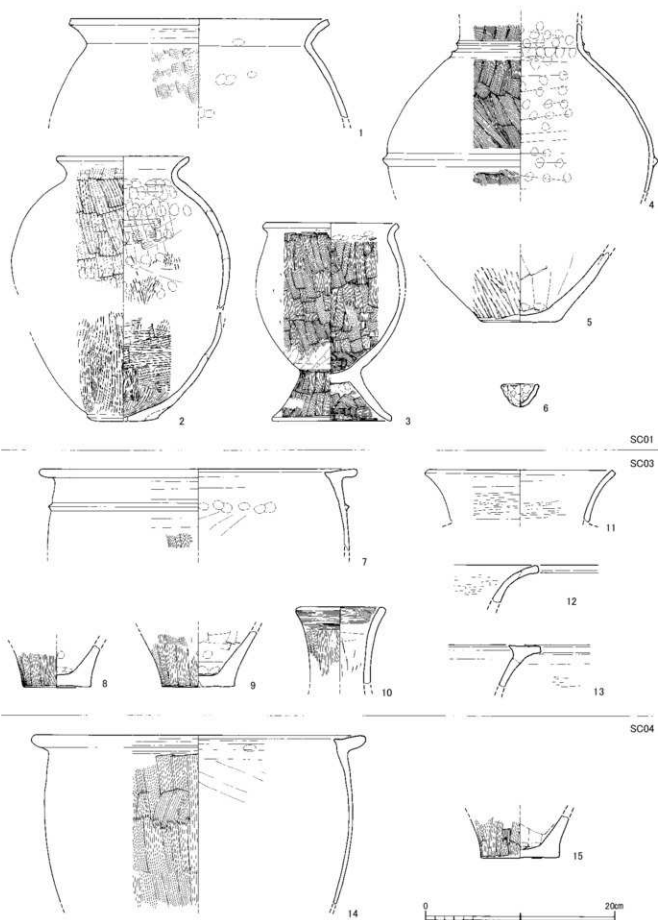
SC03 東西土層

- 1 H09K2 黒褐色シルト、に深い黄褐色粘質ブロック+0.5cm大の小片を多く含む
- 2 7.H09K2 黒褐色シルト、0.5~1cm大の深い黄褐色粘質ブロック+1~2mm大の殻小片を多く含む
- 3 H09K2 黒褐色シルト、0.5cm大の深い黄褐色粘質ブロックを含む
- 4 7.H09K1 黄褐色粘質シルト、0.5cm大の深い黄褐色粘質ブロック+0.5cm大の殻小片を多く含む
- 5 7.H09K1 黒褐色粘質シルト
- 6 H09K2 黒褐色粘質シルト、2~3cm大の深い黄褐色粘質ブロック+0.5cm以下の殻小片を含む

SC04 南北土層

- 1 H09K1 2 灰黄褐色シルト+0.5cm大の黄褐色ブロックがむだかに入る
- 2 H09K1 黒褐色シルト
- 3 H09K2 1 黒色粘質シルト+2~3cm大の深い黄褐色粘土ブロックが入る
- 4 H09K2 1 黒色粘質シルト
- 5 H09K1 2 灰黄褐色粘質シルト+1cm大の深い黄褐色粘土ブロック多く入る
- 6 H09K1 3 深い黄褐色粘質シルト+1~2cm大の深い黄褐色粘土ブロック・黄褐色ブロック多く入る
- 7 H09K1 3 深い黄褐色粘質シルト+1~2cm大の黄褐色ブロック・黒色ブロック多く入る

第4図 3・4号住居跡 実測図 (s = 1/50)



第5图 1·3·4号住居跡出土土器実測図 (s = 1/4)

軸方向は北北西—南南東である。埋土は黒褐色系シルトである。

中央に住居の長軸方向に長い145cm×90cm、深さ10～15cm程度の長円形状の土坑を有する。埋土は灰褐色土で炭と粘土の小片とが混じっていた。如と考えられ、その両側に直径25cm程、深さ5cm程度の浅いピットがみられる。北側には長軸70cm×短軸45cm、深さ28cm程度の屋内土坑がみられる。貼床はみられない。

床面付近からは土器や鉄製ヤリガンナ、黒曜石核が出土した。特に鉄製ヤリガンナは床面直上からの出土である。

出土遺物（第5・14図、図版10・12～15）

弥生土器甕口縁部（第5図7）、弥生土器甕底部（8・9）、弥生土器器台（10）、弥生土器広口壺口縁部（11・12・13）が出土した。（11・12）は素口縁部、（13）は内側に突出する水平口縁部である。

甕底部（8）はSK02北側の床面直上土器④、壺口縁部（11）は北西側土器⑤、壺口縁部（12）が北西側土器③から出土している。甕底部（7）は埋土上層から出土し、SC01の貼床層出土破片と接合している。

他に、土製投弾（第4図5）、泥窯窯壁片（7）、鉄製ヤリガンナ（13）が出土した。窯壁片（7）は片側の面から繊維疝痕が顕著に確認でき、縦に走っている。板状の平坦面もみられる。破片6個を接合したが、そのほか、焼粘土塊片が埋土から330g分出土しており、それらを含めて、弥生土器焼成の泥窯の破片の可能性を考える。鉄製ヤリガンナについては、詳細は第5章で後述する。

そのほか、黒曜石剥片が出土した。

4号住居跡（第2・4図、図版5）

調査区北東、標高18.3mで検出された。1号掘立柱建物、1・3号住居、1号甕棺墓より先行する。長軸4.4m、北東短辺1.9m、南西短辺3.0mの梯形を呈し、検出面からの深さは40cm程度である。長軸方向は北東—南西である。埋土は比較的黄褐色粘土ブロックが多く入る。黒褐色シルトで、南側からの堆積が先行する。床面中央に36cm×24cm、残存深さ15cmの長円形柱穴がみられる。その西側には126cm×92cm、残存深さ10cm程度の方形土坑があり、南東辺壁際に54cm×40cm、深さ20cm程度の土坑がみられた。壁際SK02埋土上層で弥生土器甕が出土している。貼床はみられない。

出土遺物（第5・14図、図版12）

弥生土器甕口縁部（第5図14）、弥生土器甕底部（15）が屋内土坑SK01から出土した。

他に土製投弾（第14図6）が出土した。また、焼粘土塊片が埋土から20.6g分出土した。

そのほか、黒曜石剥片、軽石片が出土した。

（2）土坑

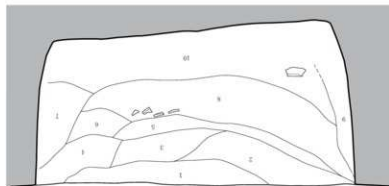
2号土坑（第2・6図、図版6）

調査区の中央、標高18.4mで検出された。1号住居に先行する。長軸1.7m、短軸1.06mの隅丸長方形形状を呈し、検出面からの深さは、90cm程度である。床面からはほぼ直に立ちあがる。下層は黒色粘質シルトで大型土器片を多く含み、中層では黒色粘質シルトで土器片や焼土粒を含んでいる。上層は黒褐色～灰褐色粘質土で焼土粒・炭小片、土器小片を含んでいる。中・下層で多くの土器が出土している。なお、広口壺（19：出土状況図⑩）が1号甕棺墓の墓壇南西側から出土した広口壺口縁部片と接合した。

出土遺物（第7・8図 図版10・11）

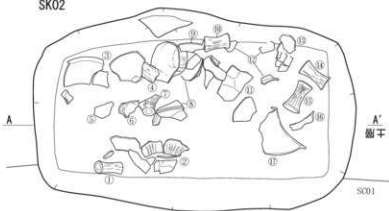
弥生土器甕口縁部（第7図1～6）、弥生土器甕底部（7～9）、汲田式甕棺口縁部（10）、弥生土器蓋天井部（11）、弥生土器鉢口縁部（12）、弥生土器高坏坏部（13）、弥生土器支脚（14・15）、弥生土器器台（16～18）、弥生土器広口壺（19～21）が出土した。甕口縁部（1）が出土状況図⑩と⑧⑨⑪、

- 1 灰褐色土層上 (砂・土層不斉状)
- 2 灰褐色土層上 (砂・土層不斉状)
- 3 灰褐色土層上 (砂・土層不斉状)
- 4 灰褐色土層上 (砂・土層不斉状)
- 5 灰褐色土層上 (砂・土層不斉状)
- 6 灰褐色土層上 (砂・土層不斉状)
- 7 灰褐色土層上 (砂・土層不斉状)
- 8 灰褐色土層上 (砂・土層不斉状)
- 9 灰褐色土層上 (砂・土層不斉状)
- 10 灰褐色土層上 (砂・土層不斉状)

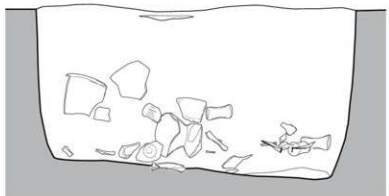


S ————— N 18.500m

SK02

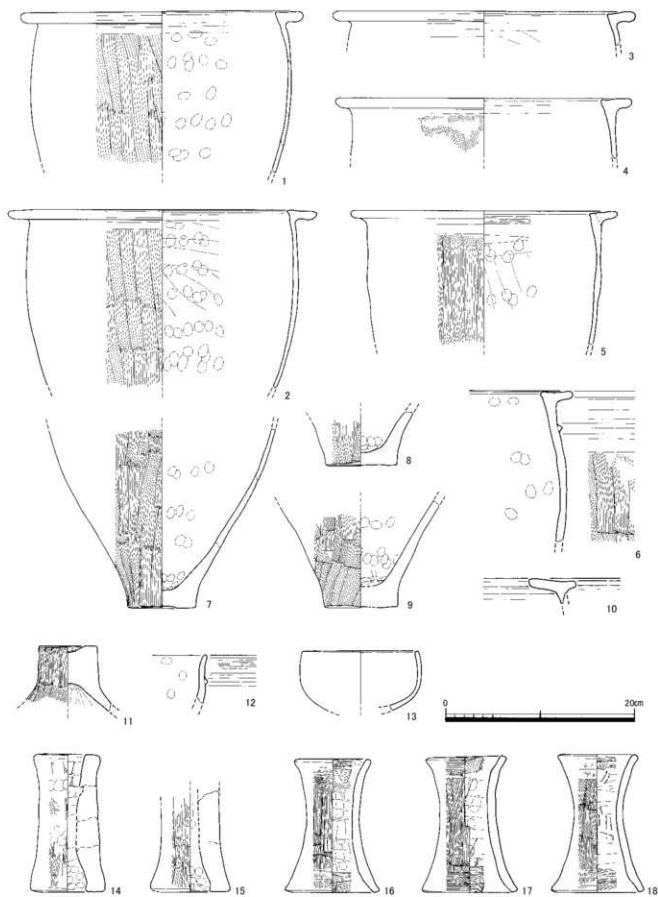


A 18.500m

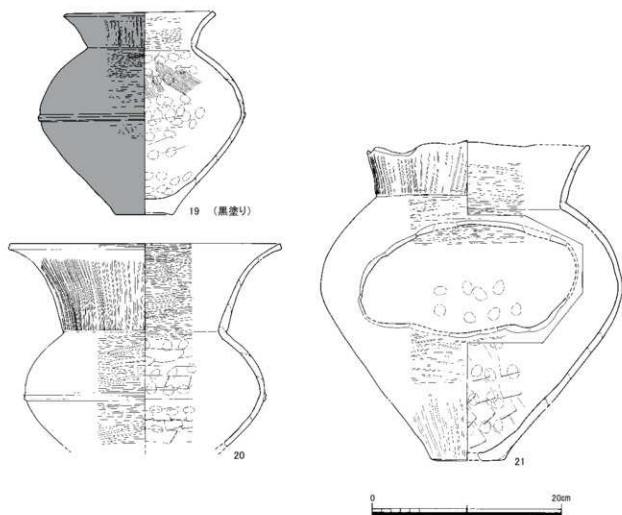


0 ————— 1m

第6图 2号土坑 实测图 (s = 1/20)



第7图 2号土坑出土土器实测图① (s = 1/4)



第8図 2号土坑出土土器実測図② (s = 1/4)

甕口縁部(2)が出土状況図③、甕口縁部(3)が出土状況図④下、甕口縁部(4)が出土状況図⑤、甕底部(7)が出土状況図⑥、甕底部(9)が出土状況図⑤、蓋天井部(11)が出土状況図⑦、支脚(14)が出土状況図①、支脚(15)が出土状況図④、器台(16)が出土状況図⑩、器台(17)が出土状況図④、器台(18)が出土状況図⑤、広口壺(19)が出土状況図⑪、広口壺(20)が出土状況図⑧、広口壺(21)が出土状況図②⑤に該当する。

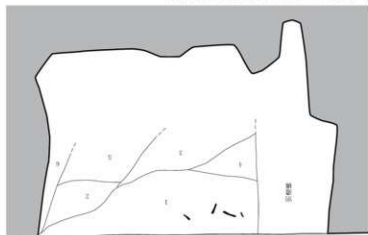
広口壺(19)は黒塗りでである。器表面が磨滅しておりはっきりわからないが、広口壺(20)は丹塗りの可能性、広口壺(21)は黒塗りの可能性が考えられる。いずれも頸部には細い縦ミガキが確認でき、広口壺(21)は口縁部を全周打ち欠いており、体部上半は楕円形状に窓状に打ち欠きを行っている。

そのほか、黒曜石剥片が出土した。

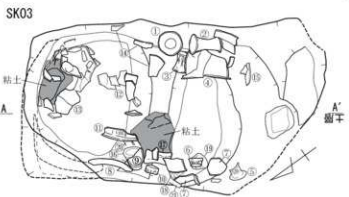
3号土坑(第2・9図、図版6)

調査区の西側、標高18.3mで検出された。1号櫛列に先行し、南側は別遺構(非常に深い柱穴)に切られている。長軸1.6m、短軸0.88mの隅丸長方形形状を呈し、検出面からの深さは、1m程度である。北側では床面近くでえぐり込みがあり、内傾して立ち上っているほかは、直に近い立ち上がりである。下層は黒色粘質シルトを主体とし、埋土中に大きな生粘土の塊が2箇所見られた。厚さは4~8cm程度である。粘土塊の周囲には大きい炭片が多数見られた。また、下層からは支脚(出土状

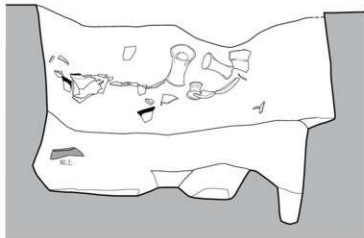
1. 第1層(上) 粘土・焼土層(赤褐色、土中に黒炭)
2. 第2層(上) 粘土層(赤褐色)
3. 第2層(下) 砂層(赤褐色)
4. 第3層(上) 粘土層(赤褐色)
5. 第3層(下) 粘土層(赤褐色)
6. 第4層(上) 粘土層(赤褐色)
7. 第4層(下) 粘土層(赤褐色)



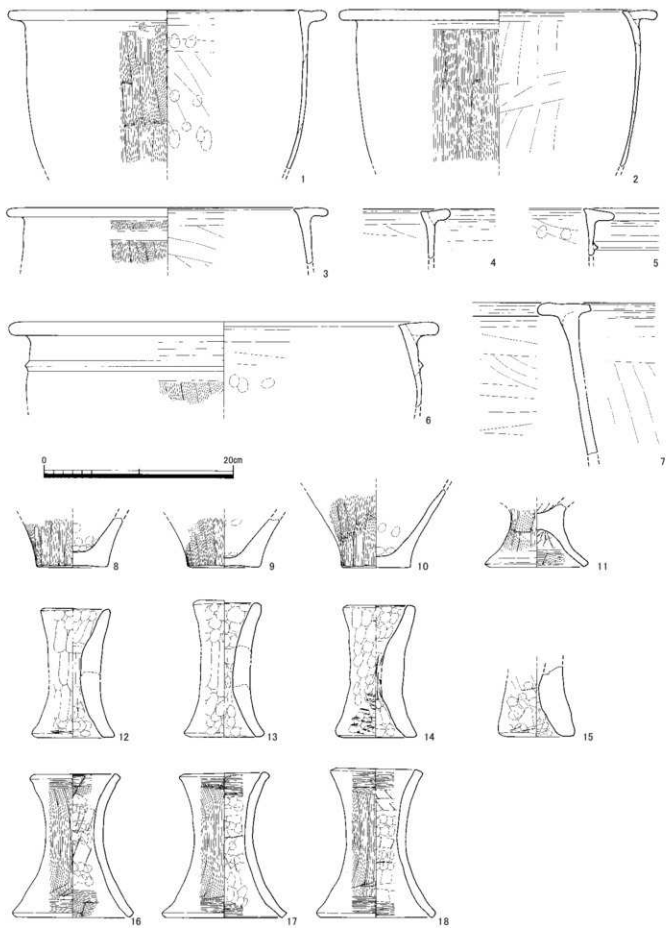
N S
18.400m



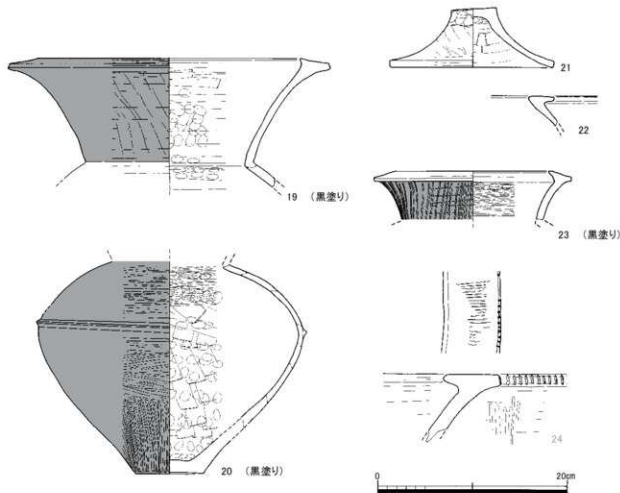
A A'
18.400m



第9図 3号土坑 実測図 (s = 1/20)



第 10 图 3号土坑出土土器实测图① (s = 1/4)



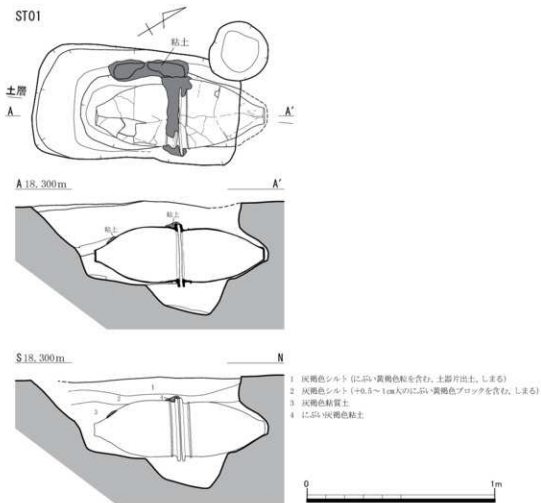
第11図 3号土坑出土土器実測図② (s = 1/4)

況図⑩～⑳)が併せて出土しており、下層出土土器の内容と中・上層出土土器の様相が異なっている。中層から上層にかけては黒褐色～黒色シルトで土器片と共に焼土粒を多く含んでいる。中層から上層にかけて多くの土器が出土している(出土状況図①～⑮)。

出土遺物(第10・11・14図 図版11～13)

弥生土器甕口縁部(第10図1～6)、汲田式甕棺口縁部(7)、弥生土器甕底部(8～10)、弥生土器高坏脚部(11)、弥生土器支脚(12～15)、弥生土器器台(16～18)、弥生土器広口壺口縁部～頸部(第11図19)、弥生土器広口壺体部～底部(20)、弥生土器無頸壺蓋・口縁部(21・22)、弥生土器短頸壺口縁部～頸部(23)、弥生土器広口壺口縁部(24)が出土した。甕口縁部(1)は下層からの出土で最下層出土土器とも接合した。他に下層からの出土は短頸壺(23)、蓋(21)である。甕口縁部(2)が出土状況図④と⑬⑭、甕口縁部(3)が出土状況図⑪、甕口縁部(4)が出土状況図⑩、甕口縁部(5)が出土状況図⑫、甕口縁部(6)が出土状況図⑧、甕底部(8)が出土状況図⑩、甕底部(9)が出土状況図⑥、甕底部(10)が出土状況図⑨、高坏脚部が出土状況図⑤、支脚(12)が出土状況図⑬、支脚(13)が出土状況図⑯、支脚(14)が出土状況図⑰、支脚(15)が出土状況図⑱、器台(16)が出土状況図⑲、器台(17)が出土状況図①、器台(18)が出土状況図③、広口壺(19)が出土状況図⑦、広口壺(20)が出土状況図⑲に該当する。上層からの出土は、甕棺口縁部(7)、無頸壺口縁部(22)、広口壺口縁部(24)である。

広口壺(19)は内側に弱く突出する水平口縁を持ち黒塗りでである。広口壺体部～底部(20)、短頸壺(23)も黒塗りでである。広口壺口縁部(24)は鋤先口縁を持ち、口縁端部には刻目、口縁上部の平坦面には線刻、頸部には縦方向ミガキによる暗文がみられる。非常に口縁の径が大きい、大型壺である。



第12図 1号甕棺墓 実測図 (s = 1/20)

他に、董青石ホルンフェルス製石庖丁(1)、石英斑岩製小形砥石(3)が出土した。石庖丁(1)はかなり風化しているが、紐ずれを確認した。刃こぼれは風化のため、はっきりしない。B面は粗い研磨段階で留まっている。砥石(3)は小形の方柱状のもので、下側は欠損している。主要面には浅くてやや砥石の軸と異なる長い凹みが確認できる。研面は4面確認できる。そのほか、土器焼成時の焼成破裂片が出土した。

(3) 甕棺

1号甕棺墓(第2・12図 図版7)

調査区東側、標高182mで検出した。墓壇の検出規模は1.1m×0.6mの隅丸長方形を呈し、深さは42cmで、中央付近がさらに一段深く、18cm程度下がる。接口式小児棺で、墓壇を斜め下方に掘り下げ、中央部分では一段深く下がるが、そこには土を充填して、北東壁で16cm程度横穴を掘り込んで下甕を挿入する。甕棺の主軸はN-30°-Eで、埋地角度はほぼ水平である。なお、墓壇南西側から出土した大口壺口縁部片が2号土坑出土大口壺(19:出土状況図⑱)と接合した。そのほか、埋土中から黒曜石剥片が出土した。

甕棺(第13図 図版12)

上甕 小形の甕である。口縁部はやや内側に突出する逆L字口縁である口縁下3cmの位置に断面三

角形状の突帯を巡らしている。ほぼ完形で、口径33.75cm、器高43.1cm、底径7.7cmを測る。内面は指オサエ後板状工具ナデ、外面はハケメがみられる。胎土はやや粗く3mm以下の砂粒をやや多く含む。色調は橙～にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。外面は煤の付着がみられ、底部付近は煤が飛んでいるが、下半上位には顕著に付着している。内面には胴部中位にコケが確認できる。

下甕 小形の甕である。口縁部はやや内側に突出する逆L字口縁である口縁下5cmの位置に断面三角形状の突帯を巡らしている。ほぼ完形で、口径39.0cm、器高45.3cm、底径8.35cmを測る。内面は指オサエ後板状工具ナデ、外面はハケメがみられる。胎土はやや粗く3mm以下の砂粒をやや多く含む。色調はにぶい橙～にぶい黄橙色を呈し、焼成は良好である。外面は下半に顕著に煤の付着がみられる。底部外面にはかなり小径の種子圧痕がみられた。

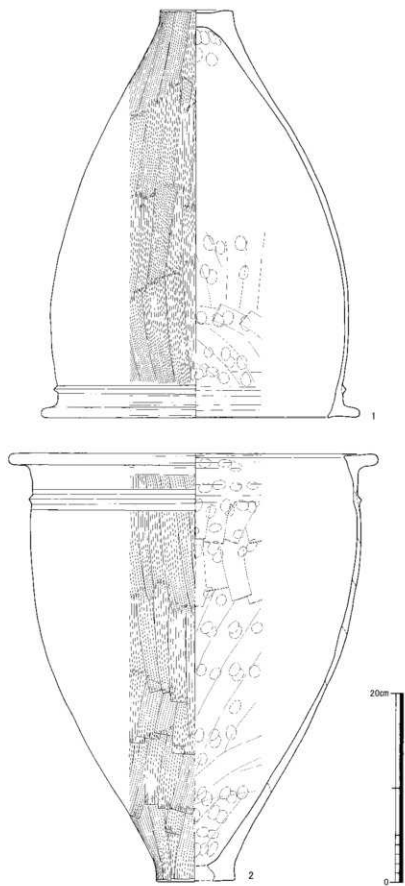
(4) 溝状遺構

1号溝(周溝状遺構)(第2図、図版1)

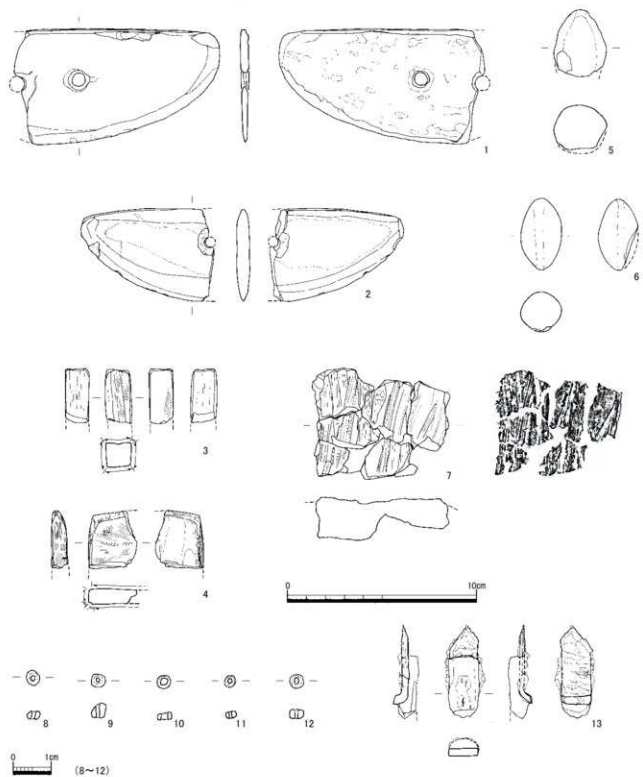
調査区南東隅、標高18.3mで検出した弧状溝である。ピットに切られ、東側と南側への延長は調査区外に及ぶ。検出長さ3.8m、幅25cm程度、深さ10～15cm程度である。

出土遺物

弥生土器小片が出土している。



第13图 1号瓷棺 实测图 (s = 1/4)



第14図 小郡若山遺跡9出土石器・土製品・ガラス製品・鉄器実測図 (s = 1/1, 1/2)

2. 奈良時代の遺構と遺物

(1) 掘立柱建物

1号掘立柱建物（第2・15図、図版8）

調査区東側、標高18.4mで検出した、2間×2間の総柱建物である。1・3・4号住居、1号竈棺墓より後出する。主軸をN-41°-Wにとる南北棟である。規模は桁行3.8～3.9m、梁行3.2～3.3m、桁間1.8～2.0m、梁間1.6～1.8mを測る。柱掘り方は不整円形～隅丸方形状を呈し、長軸65～115cm、短軸42～78cm、深さ65～85cmを測る。断面観察では、すべての柱の抜取痕が確認でき、底面には柱のあたりが残っているものがある。

出土遺物

P4から弥生時代の土製投彈が出土した。混入品である。そのほか、ピット埋土からはわずかに土師器小片も出土している。

(2) 櫓列

長方形の掘り方を持つ柱穴が確認されたが、削平を受けており残存はわずかである。調査区内では建物を復元するには至らなかったため、櫓列（柱列）として報告する。

1号櫓列（第2・16図、図版8）

調査区東側、標高18.3mで検出した、3号土坑より後出する。調査区内では2本の柱穴のみの確認である。主軸はN-2°-Wである。柱間3.9m程度である。柱掘り方は隅丸方形状を呈し、P1は長軸108cm×短軸96cm、深さ18cm程度である。灰褐色～黒褐色シルトの埋土である。

出土遺物

P2から土師器高台付坏底部小片が出土した。

2号櫓列（第2・16図、図版8）

調査区中央、標高18.3mで検出した、1・3号住居より後出する。調査区内では3本の柱穴のみの確認である。主軸はN-5.5°-Wである。柱間3.0m程度である。柱掘り方は隅丸方形状を呈し、P2は長軸102cm×短軸96cm、深さ20cm程度である。黒褐色シルトの埋土でやや南寄りに柱痕が確認できる。

出土遺物はみられない。

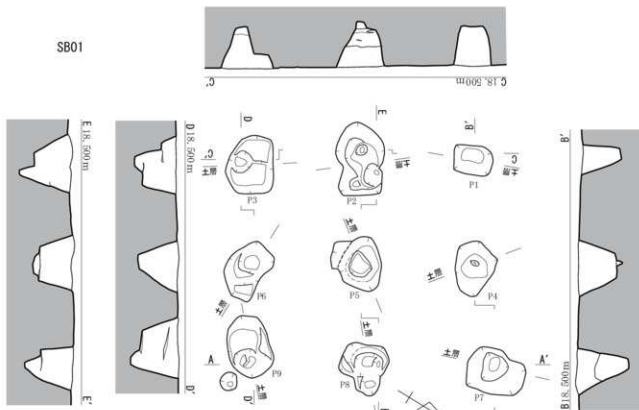
3号櫓列（第2・16図、図版1）

調査区北側、標高18.0mで検出した、調査区内では4本の柱穴のみの確認で北側の調査区外に広がる掘立柱建物も想定されるだろう。主軸はN-86°-Wである。柱間1.8～2.1mである。柱掘り方は円形を呈し、直径48～55cm、深さ36～48cmである。黒褐色シルトの埋土である。

出土遺物

弥生土器小片が出土した。

SB01



P1

- 1 黒褐色砂質土 (2.573/2)
 - 2 黒色粘質土 (1070)/2, 黒褐色砂質土を含む
 - 3 黒色粘質土 (1070)/2, 明黄褐色粘土を多く含む
- P2
- 1 黒褐色土 (1mm以下の黄ブロックを含む)
 - 2 黒褐色土
 - 3 第2層+黒褐色地山ブロック

P3

- 1 黒褐色土 (0.5cm以下の黄ブロックを含む, しまる)
- 2 黒色土 (しまる)

P4

- 1 黒色砂質土 (1072/1)
- 2 黒色粘質土 (1072)/1, 明黄褐色粘土ブロックを含む
- 3 黒色粘質土 (1072)/2, 明黄褐色粘土ブロックを含む

P5

- 1 黒褐色砂質土 (2.573/2)
- 2 黒色粘質土 (1072)/1, 明黄褐色粘土ブロックを少量含む
- 3 黒色粘質土 (1072)/1
- 4 黒褐色粘質土 (2.573/2)

P6

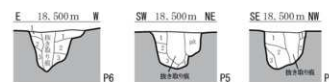
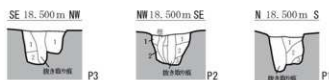
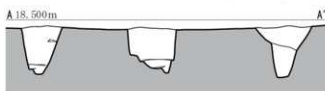
- 1 黒褐色砂質土 (2.573/1, 黒色粘質土や明黄褐色粘土ブロックを含む)
- 2 黒褐色粘質土 (2.573)/2, 明黄褐色粘土ブロックを含む
- 3 黒色粘質土 (1072)/1

P7

- 1 灰黒褐色土 (1mm以下のブロック土, しまる)
- 2 黒褐色土 (+3cm以下の黄褐色ブロックとシマ(花)に入る, しまる)
- 3 黒色土 (+1mm以下のブロック土, しまる)

P8

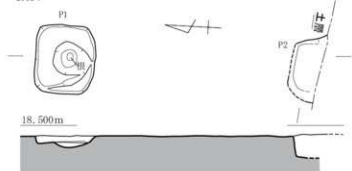
- 1 黒褐色土
 - 2 灰黒褐色土 (しまりなし)
 - 3 黒褐色土
- P9
- 1 黒褐色砂質土 (2.573/1)
 - 2 黒色粘質土 (2.572/1, 黒褐色粘土を含む)
 - 3 黒色粘質土 (2.572/1)
 - 4 黒褐色砂質土 (2.573/1, 明黄褐色粘土ブロックを含む)
 - 5 明黄褐色粘質土 (1076/6)



0 2m

第15図 1号掘立柱建物 実測図 (s = 1/60)

SA01

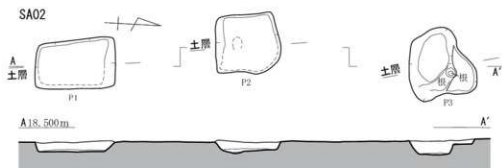


E 18,500 m W



- 1 灰褐色土 (褐色粒・砂粒を少量含む)
- 2 黒褐色粘質シルト (1mm以下の砂粒を含む、茶褐色粘土ブロックを少量含む)
- 3 第1層・第2層
- 4 灰褐色に2～3cm大の黄褐色粘土ブロックを多く含む

SA02



S 18,500 m N



- 1 灰褐色+0.5cm大の茶褐色ブロック
- 2 黒褐色+1～2mmの茶褐色粒

S 18,500 m N



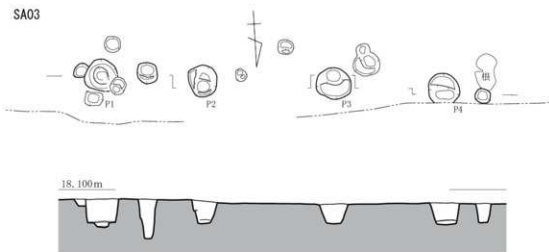
- 1 黒褐色土+0.1～0.2mmの茶褐色ブロック、
しまる
- 2 灰褐色土+1cm大の茶褐色ブロックを含む、
しまる

S 18,500 m N

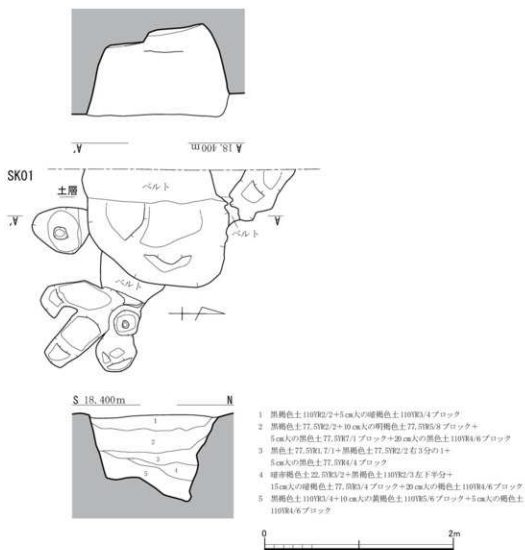


- 1 灰原褐色土+1～2cm大の茶褐色ブロック・
0.5cm大の炭化物、しまる
- 2 黒褐色土+1～2cm大の黄褐色土ブロック、
しまる

SA03



第16図 1・2号横列 3号掘立柱建物 実測図 (s = 1/60)



第17図 1号土坑 実測図 (s = 1/40)

(2) 土坑

1号土坑 (第2・17図、図版6)

調査区北西隅に位置し、西側は調査区外に及ぶ。平面は隅丸方形、もしくは楕円形で、南北148m、東西1.2m以上、深さ98cmを測る。壁面は南側と惣が市側にテラス面を持って階段状に立ち上がる。出土遺物は少なく、黄褐色粘土ブロックを多く含む黒褐色系の埋土である。

出土遺物

奈良時代の高坏脚部片が出土した。

第5章 調査成果のまとめ

1. 小郡若山遺跡9の遺構変遷と構成

(1) 遺構の時期と内容

各遺構の時期について検討する。1号住居跡はベッド状遺構を短辺に持つもので、床面付近から出土した土器から高三階式新段階～下大限式の時期が与えられる。屋内土坑出土壺下半部と2.6m離れたベッド状遺構付近で出土した壺上半部が接合し、住居廃絶時の様子を示している(第3図)。床面直上や床面付近の埋土中からガラス小玉5点が出土した。これまでも弥生時代後期以降の住居埋土からガラス小玉が数点出土する事例が知られるが、本調査の1号住居跡からの出土状況からは、廃絶初期段階でガラス小玉を入れている(撒いている)状況が窺える。

3号住居跡は小判型を呈する住居である(第4図)。床面出土土器から須玖I式新段階の時期が与えられ、床面からは柄付き鉄製ヤリガナが出土した(第14図)。

3号住居跡に切られる4号住居跡は方形の住居である(第4図)。屋内土坑から須玖I式の土器が出土している。4号住居跡は1号壺棺にも切られている。1号壺棺は須玖I式新段階の壺を棺体としており、小児棺としては目貼り粘土が丁寧に充填されている(第12図)。階段状に墓壇を掘り込み、1段目と水平になる横穴を掘削し、下壺を挿入する。2段目の掘り込みは目貼り用の粘土を獲得するための可能性も考えられる。目貼り粘土は合わせ口の上面から側面、そして墓壇の西側にも分布しており、西側の粘土は余った粘土とも考えられる。

1号壺棺墓の墓壇南西側の埋土から出土した広口壺口縁部片が2号土坑下層出土広口壺(出土状況図⑬)と接合したので(第8図19)、一時期の同時性がうかがえる。広口壺は黒塗りでほぼ完形に復原できる。

2号土坑からは、下層から中層にかけて多くの土器がまとめて出土している(第6図)。須玖I式新段階の土器群が汲田式壺棺片を伴い、日常容器と壺棺の併行時期が窺える。3号土坑も同様に中層から上層にかけて多くの土器がまとめて出土した(第9図)。若干の時期幅があり、須玖I式新段階から須玖II式古段階の日常土器と汲田式壺棺片が出土している。

1号掘立柱建物・1～3号柱列の詳細時期は不明であるが、土師器片の出土から奈良時代の所産と推定される。

次に、土器の遺構間接合関係を確認しておく。

1号住居跡では、屋内土坑SK01出土壺下半部とベッド状遺構付近で出土した壺上半部が接合しており(第5図2)、住居廃絶時に屋内土坑からベッド状遺構までは2.6mの距離があるが(第3図)、その一帯に土器の廃棄が行われている。

さらには、1号壺棺墓と2号土坑出土土器の接合関係が確認できた(第6図19)。2号土坑は各種の土器がまとめて投棄された状態で確認され、いわゆる「祭祀土坑」とよばれる遺構である(第6図)。2号土坑には、壺、壺、器台、支脚、鉢などの各種土器が集中して出土した。土坑出土土器のすべてが完形に復原されるわけではない。遅く推測すれば、小児棺を設置して埋める際に、儀礼(飲食も伴う?)を行い、そのときに使用した土器等を2号土坑にまとめて投棄したことも考えられる。単なる「祭祀土坑」が一つの具体的なイメージを持つ可能性があり、このような周辺遺構との接合関係は非常に重要であろう。今回の調査区は狭小であり、同時併存した遺構群が広域には明らかにはなっていないが、一時的な集落景観の復元を試みることによって、当時の信仰や社会を考古学が復元できる可能性を有していると思われる。

2. 3号住居跡出土柄付きヤリガンナについて

3号住居跡出土柄付き鉄製ヤリガンナは注目される資料である。共伴土器から須玖I式新段階の鉄器資料で比較的古い時期のものである。鉄製ヤリガンナ資料はX線写真を撮ることによって着装基部で鉄素材が短く屈曲する部分が観察できた。また、柄が良好に残っており、取り付けの状態が推測できることも重要である。木質は表面に残っており、断面はかまぼこ状である（縦方向に木質繊維が走る）。鉄製ヤリガンナの幅とはほぼ同じくらいの柄の幅となっている。また、屈曲部にあわせて柄もくりぬいて成形されていることが窺える。柄の上端は成形・使用時の面を残しているが、下端は破損しており、本来はもう少し長さがあったものと考えられる。鉄製ヤリガンナの裏側にも木質部（錆についた圧痕から横方向の柾目か）を添えて、桜皮等で縛ったと考えられる。

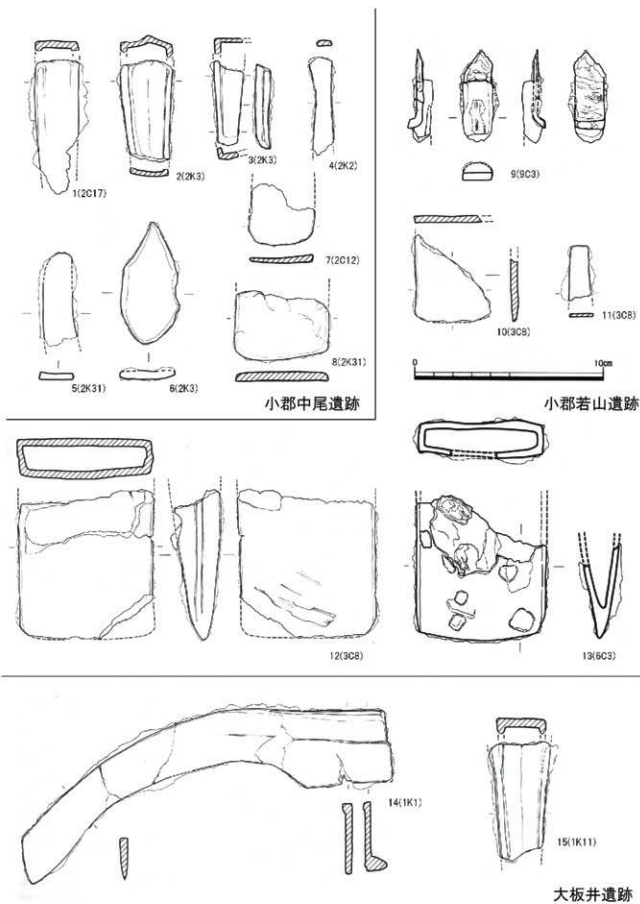
鉄製ヤリガンナの刃先は、本来もう少し長さがあったと思われるが、使用により短くなっている。刃先は一部欠損している。現状で刃の付け方は右側が短く（1.1cm）、左側がやや長い（1.5cm）。柄を入れた残存長さ47cm、幅2.1cm、高さ1.3cm、重さ108gである。鉄の身の厚さは0.35cmである。

このヤリガンナは、一つの可能性として鑄造鉄斧の側面から主面に至る破片の再加工品で、側面部分の屈曲部を基部に、鉄斧上面の平坦面を刃部に配置したものと考えた。しかし、鑄造鉄斧破片を利用した利器やヤリガンナの例はこれまでもいくつか知られるが、鑄造鉄斧の側面から主面に至る破片利用の資料はなく、即断はできない。鉄板から屈曲部を再加工したのもと考えられるし、鑄造ではなく、鍛造の可能性も残されている。

本資料は、青銅製のヤリガンナと共通する刃の形状を持っており、青銅製ヤリガンナの影響を強く受けている。通常の鉄ヤリガンナでみられる柳葉形の刃先や断面形状の裏側がくぼんで緩いカーブを持つ「ウラスキ」の形状とは異なっている。最近、石川県八日市地方遺跡で出土した柄付き鉄ヤリガンナが注目をされたが、そのヤリガンナも小郡若山遺跡9出土の鉄ヤリガンナと同様に、刃先は青銅製ヤリガンナに共通し、「ウラスキ」を持たない形状であった。双方とも木工具が青銅製から鉄製へと移り変わる過渡的な段階をよく示す資料と考えられる。朝鮮半島で原三国時代に出土する鉄ヤリガンナはやはりこの「ウラスキ」を持つので、青銅製ヤリガンナの形状と類似する日本列島出土の鉄ヤリガンナは日本列島での木工具の特徴や鉄素材獲得の状況を反映しているものと考えられる。



写真1 小郡若山遺跡9出土柄付き鉄製ヤリガンナCT画像



第18図 小郡若山遺跡・小郡中尾遺跡・大板井遺跡出土初期鉄器(s = 1/2)

第 18 図は小郡若山遺跡周辺で出土した弥生時代中期前半を中心とした時期の鉄製品である。野島永氏によって、全国的な初期鉄器の集成があり、その判断を基にした（野島 2008）。特にこの時期の鉄器片は、両側縁あるいは一方が短く折れ曲がるものや双合范の鍔バリが確認されるものがあり、これらは中国戦国時代の燕地域の鑄造鉄斧の破片であることが指摘されている（野島 1992）。小郡市でもそれらの鉄製品が多く確認されている。

小郡中尾遺跡 2 次調査の弥生時代中期前半代の資料（中期後半代の可能性があるものを含む）は、SC12 出土鉄板破片（7）は層状に錆化していることから鍛造によるものと判断された（野島 2008）。（8）は SK31 から出土した鉄板である。鑄造鉄斧主面破片の可能性が高い。

SC17 出土は須玖 I 新～須玖 II 式の資料である。鑄造鉄斧袋部側面破片（1）。（2・3）は SK03 出土の鑄造鉄斧袋部側面破片で、（2）は下端部分が研磨され、鉄鑿として使用されたものとみられる。（4）は SK02 出土の薄い鉄板で鑄造鉄器と考えられる。そのほか、SK31 より鉄板（5）SK03 より鉄板（6）が出土している。

小郡若山遺跡では、3 次 8 号住居（須玖 I 式）より鉄器が出土している。（10）は扁平な鉄板で、層状の錆化が確認され鍛造品の可能性が高いと判断された（野島 2008）。（11）も鍛造鉄器片、あるいは鉄板片と考えられる。（12）は小型の鑄造鉄斧である。現存長さ 7.9cm、幅 7.2cm、側面の器厚さは 4.3mm から 4.7mm である。双合范の合わせ目が明瞭にのこっている。（13）は同じく、小型の鑄造鉄斧で、SC03 の中央土坑より出土（須玖 I 式～II 式古）。現存長さ 6.3cm、幅 6.3cm、側面の器厚は 4mm 前後である。

大板井遺跡では、I 区 1 号祭祀土坑の床面から出土した鉄鎌（14）である。須玖 I～II 式古にかけての土器群の下から出土した。全長は 20cm 程度で、基部に木柄を装着するための折り返しがなく、背側に隆起帯をもっている。基部の刃部側端部に高さ 8mm の突起が取りつく。

松井和幸は鑄造品を脱炭した鉄器であることを想定している（松井 2001）。また、鑄造鉄斧袋部側面の破片、あるいはそのほかの鑄造鉄器の破片を、刃部となる先端部鉄板材と鍛接したものと想定もされている（野島 2008）。（15）は I 区 11 号祭祀土坑からの出土。須玖 I 式～II 式古の土器と共に出土した。鑄造鉄斧袋部側面の破片と考えられる。

以上のように、小郡若山遺跡周辺では、弥生時代中期前半を中心とする初期鉄器資料が比較的多く確認されている。今後、所属時期の詳細を確認し、当地域における集落動向とともに鑄造鉄斧やその破片の流入、利器としての再加工の様相について検討しなければならないだろう。

小郡若山道跡9 遺物観察表

法量=口径、高器高、底径、体径最大径、天頂直径、受容直径、脚径(脚部直径)
 形状=口径、高器高、底径、体径最大径、天頂直径、受容直径、脚径(脚部直径)
 形状=口径、高器高、底径、体径最大径、天頂直径、受容直径、脚径(脚部直径)

解部番号	遺物番号	出土遺構	器種	法量cm ³ (單元径)	色調	胎土	強度	成形・調整方法	備考	
第5図	1	-	上層 東平	弥生	残存高17.7 径29.2	褐色	粗 径3mm以下の砂粒を多く含む	口-内、内-内 板状工具片 ¹⁾ 口-内、内-外 ²⁾ 口-内、内-内 ³⁾	SC1法量東平・東平下層出土片と接合。底部内面に土質異質。	
										SC1
	土器②	弥生・付置	口14.35 高20.95 脚径12.7	内灰白〜にぶい 黄褐色 外灰白〜流黄褐色	やや粗 径2mm以下の砂粒をやや多く含む	口 ³⁾ ¹⁾ 体-内、脚 ²⁾ 体-外 ²⁾ 、中位〜下位は外 ²⁾ 底-内 ²⁾	SC1法量・西側・北平出土片と接合。底部内面に黒質。			
								土器③	弥生	
	PSK1土器①±その他	弥生	残存高7.2 底8.4	内〜にぶい黄褐色 外流黄褐色	粗 径3mm以下の砂粒を多く含む	内-内 板状工具片 ¹⁾ 体-外 ²⁾ 底-内 ²⁾ 底-外 ²⁾ ¹⁾				
								下層西平	弥生・手捏ね	
	7	10	南平	弥生	口33.7 残存高8.6	内〜にぶい黄褐色〜にぶい黄褐色 外流黄褐色〜にぶい 褐色	やや粗 径2mm以下の砂粒をやや多く含む			
								8	-	
	9	-	上層	弥生	残存高5.8 底7.65	にぶい黄褐色	やや粗 径2mm以下の砂粒をやや多く含む			
								10	-	
	11	10	土器⑤	弥生	口20.1 残存高5.45	にぶい褐色	やや粗 径10mm以下の砂粒を多く含む			
								12	-	土器⑥
13	-	南平	弥生・底口蓋	残存高4.4	褐色	やや粗 径2mm以下の砂粒をやや多く含む	口 ³⁾ ¹⁾ 器 ²⁾ 、器蓋厚減のため調整不明 器 ²⁾ 、器蓋厚減のため不鮮明			
								14	10	SK1内土器
15	-	層内SK1	弥生	残存高4.43 底3.2	内〜にぶい黄褐色 外流黄褐色〜にぶい 黄褐色	やや粗 径2mm以下の砂粒をやや多く含む	内-内 板状工具片 ¹⁾ 体-外 ²⁾			
								7	10	土器⑦
2	-	土器⑧	弥生	口32.7 残存高18.6	内褐色〜にぶい赤褐色 外にぶい褐色	粗 径2mm以下の砂粒を多く含む	口 ³⁾ ¹⁾ 体-内 ²⁾ 体-外 ²⁾			
								3	-	土器⑨
4	-	土器⑩	弥生	口33.4 残存高6.1	にぶい黄褐色〜褐色	粗 径3mm以下の砂粒を多く含む	口 ³⁾ ¹⁾ 体-内、器蓋厚減のため調整不明 体-外 ²⁾ 、器蓋厚減のため不鮮明			
								5	-	上層
6	-	中層 土器群	弥生	残存高15.85	内〜にぶい黄褐色 外にぶい黄褐色〜にぶい 褐色	粗 径5mm以下の砂粒を多く含む	口=突 ³⁾ ¹⁾ 体-内 ²⁾ 体-外 ²⁾			
								7	10	土器⑪
8	-	上層	弥生	残存高5.8 底7.5	内〜にぶい黄褐色〜にぶい黄褐色	粗 径3mm以下の砂粒を多く含む	体-内〜内 ³⁾ ¹⁾ 体-外 ²⁾ 底-外 ²⁾			

棟号	図面	出土遺構	種類	法量6m ² (單元積)	色調	胎土	構成	成形・調整方法	備考
第7図9	-	土器⑤	弥・甕	残存高11.3 底7.7	内壁～黄灰色 外壁～にぶい黄褐色	粗 径4mm以下の砂粒を多く含む	良	体・内蓋者摩滅のため調整不明 体・外ハケ 底子	SK2下層出土片と接合。 底部内面に3ヶ所残存。
第7図10	-	土層	弥・甕	残存高2.6	内になぶい黄褐色 外になぶい褐色	やや粗 径4mm以下の砂粒をやや多く含む	良	3ヶ所	
第7図11	-	土器⑦	弥・蓋	天6.1 残存高6.8	内になぶい黄褐色 外褐色	やや粗 径2mm以下の砂粒をやや多く含む	良	体・外ハケ 他は子	
第7図12	-	土層	弥・鉢	残存高5.05	になぶい褐色	やや粗 径2mm以下の砂粒をやや多く含む	良	体・外上位はハケ 他は3ヶ所	内面に黒炭。
第7図13	-	土層	弥・高杯?	口(12.2) 残存高6.3	内になぶい褐色 外明赤褐色	粗 径2mm以下の砂粒を多く含む	良	器蓋摩滅のため調整不明	底部内面に黒炭。
第7図14	10	土器①	弥・支脚	高2.05 高14.55 底7.85	内灰黄褐色 外壁～にぶい褐色	やや粗 径3mm以下の砂粒を多く含む	良	受・環、底・縁3ヶ所 体・内上位は板状工具子、中位～下位は3ヶ所 体・外ハケ	
第7図15	11	土器④	弥・支脚	残存高11.95 底8.4	内になぶい褐色 外になぶい褐色～ にぶい黄褐色	やや粗 径17mm以下の砂粒を やや多く含む	良	体・外ハケ成子 他は3ヶ所、子	
第7図16	10	土器⑤	弥・蓋台	高8.1 高14.15 底10.0	壁～にぶい褐色	粗 径2mm以下の砂粒を多く含む	良	受・環、底・縁3ヶ所 体・内上位、下位はハケ、中位は子 体・外ハケ、上位はその板状工具子、下位はその後3ヶ所	底部端部にあわずかに入?
第7図17	-	土器⑥	弥・蓋台	高5.8 高14.45 底10.15	内になぶい褐色～黄 灰色 外壁～にぶい褐色	粗 径2mm以下の砂粒を多く含む	良	受・環、底・縁3ヶ所 体・内上位、下位はハケ、中位は子 体・板状工具子 体・外ハケ	
第7図18	10	土器⑦	弥・蓋台	高8.4 高14.6 底9.8	内黄灰～にぶい 褐色 外～にぶい褐色～ 褐色	粗 径4mm以下の砂粒を多く含む	良	受・環、底・縁3ヶ所 体・内上位、下位はハケ、中位は子 体・板状工具子 体・外ハケ、上位はその後板状工具子	
第8図19	11	土器⑧	弥・広口壺	口16.1 高21.6 腹10.4 体21.9 底6.1	内壁～にぶい黄 褐色 外になぶい褐色	粗 径3mm以下の砂粒を多く含む	良	口・環、突3ヶ所 内ハケ2ヶ所 口・外ハケ後ハケ3ヶ所 体・内上位は板状工具子、一部 その後ハケ、中位～下位は子 体・上半はハケ、器蓋摩滅のため不鮮明、下半は器蓋摩滅のため調整不明 底・内子 器・外蓋者摩滅のため調整不明	SK2下層-ST1南側出土片と接合。 黄色磨研土器。 底部外周下～底部外面に黒炭。
第8図20	11	土器⑨	弥・広口壺	口(28.9) 残存高21.5 腹(17.2) 体(25.7)	内壁～にぶい黄 褐色 外壁～ 明赤褐色	やや粗 径2mm以下の砂粒をやや多く含む	良	口・環、突3ヶ所 口・体・外ハケ2ヶ所 体・内板状工具子	SK2上半東半・上層北半・中層土器群・下層・下層北半・下層北半器23号、ST1出土片、SK2土器⑤と接合。 黄色磨研土器?
第8図21	11	土器⑩	弥・広口壺	口23.55 高33.9 腹20.0 体31.9 底7.75	内になぶい褐色～ 褐色 外になぶい褐色～ にぶい黄褐色	粗 径10mm以下の砂粒を多く含む	良	口・環、突3ヶ所 口・外ハケ2ヶ所、器蓋摩滅のため不鮮明 体・内上半は器蓋摩滅のため調整不明、下半は板状工具子、黄色磨滅のため不鮮明 体・外ハケは、器蓋摩滅のため不鮮明 底・内子 器・外蓋者摩滅のため調整不明	SK2東半上層・下層出土片、土器⑤と接合。 黄色磨研土器? 底部上半を凹状に打ち欠き。
第10001	11	土層	弥・甕	口(33.6) 残存高16.8	内褐色 外になぶい褐色	やや粗 径3mm以下の砂粒をやや多く含む	良	口・環3ヶ所 体・内子 体・外ハケ	SK3最下層出土片と接合。
第10002	11	土器⑬	弥・甕	口(33.6) 残存高16.45	内になぶい褐色～ 黄褐色 外になぶい褐色～ にぶい褐色	やや粗 径2mm以下の砂粒をやや多く含む	良	口3ヶ所 体・内子 体・外ハケ	口縁部端部～体外面に入。
第10003	-	土器⑪	弥・甕	口(34.0) 残存高5.9	内になぶい褐色	やや粗 径3mm以下の砂粒を多く含む	良	口3ヶ所 体・内子 体・外ハケ	
第10004	-	土器⑭	弥・甕	残存高5.1	内になぶい褐色 外になぶい褐色～ 黄褐色	やや粗 径3mm以下の砂粒をやや多く含む	良	口・体・外3ヶ所 体・内子	口縁部端部～体外面に入。
第10005	-	土器⑮	弥・甕	残存高5.05	内黄灰色 外になぶい褐色	やや粗 径4mm以下の砂粒をやや多く含む	良	口・突3ヶ所 体・内子	口縁部端部～体内面に黒炭、口縁部外面に入。
第10006	-	土器⑯	弥・甕	口(25.3) 残存高6.95	内灰黄褐色～黄 褐色 外淡黄褐色～淡 黄褐色	粗 径3mm以下の砂粒を多く含む	良	口・突3ヶ所 体・内子 体・外ハケ	口縁部に黒炭。

計画 番号	原簿 番号	出土場所	種類	重量20mm (個元量)	色調	土質	構成	成形・調整方法	備考
第10回 7	-	上層西半	砕・壁粒	残存高16.15	内におい黄褐色 外におい褐色	やや粗 径6mm以下の砂粒をや や多く含む	良	口337+ 体・内下+337+ 体・外下+	
第10回 8	-	土層⑥	砕・壁	残存高5.1 底8.25	内におい褐色 外におい黄褐色	やや粗 径3mm以下の砂粒をや や多く含む	良	体・外下+ 他は337+	体部外面に入。
第10回 9	-	土層⑥	砕・壁	残存高5.1 底(7.6)	内におい褐色 外におい 褐色	粗 径5mm以下の砂粒を多 く含む	良	体・内一底・内器裏摩滅のため調整 不明 体・外下+ 底下+	体部内面は337+
第10回 10	-	土層⑥	砕・壁	残存高8.25 底7.4	内におい黄褐色 外淡黄褐色	やや粗 径3mm以下の砂粒をや や多く含む	良	体・内 板状工具下+ 体・外下+ 底下+	体部内面下位に黒炭、底 部内面は337+
第10回 11	-	土層⑥	砕・黒片	残存高6.6 底-標10.9	部におい黄緑 ～灰黄褐色 部外におい褐色	やや粗 径2mm以下の砂粒をや や多く含む	良	杯・内 板状工具上+下337+後下+ 部・内 上半は板状工具上+下337+ 下下は下+ 部・外 337+後上位～中位は下+ 底下+	杯部内面に入。 外部外面に黒炭。
第10回 12	11	土層⑥	砕・支脚	受7.85 高13.6 底8.75	内におい褐色 外におい褐色	やや粗 径3mm以下の砂粒をや や多く含む	良	受・端、底・端337+ 体・内 上位、下位は下+、中位は3 37+ 体・外下+	体部外面上位に黒炭。
第10回 13	11	土層⑥	砕・支脚	受7.2 高14.5 底(8.45)	内におい褐色～ い褐色 外におい褐色～ い黄褐色	やや粗 径8mm以下の砂粒をや や多く含む	良	受・端、底・端337+ 体・内 上位、下位は下+、中位は3 37+ 体・外下+	
第10回 14	11	土層⑥	砕・支脚	受7.6 高14.0 底8.55	内褐色～灰黄褐色 外淡黄褐色	やや粗 径11mm以下の砂粒を やや多く含む	良	受・端、底・端337+ 体・内 上位、下位は下+、中位は3 37+ 体・外下+	体部外面下位に灰炭。
第10回 15	12	土層⑥	砕・支脚	残存高7.4 底6.1	におい黄褐色	やや粗 径2mm以下の砂粒をや や多く含む	良	体・内 中位は下+後板状工具下+ 体・外 板状工具下+後下+ 底・端337+	体部外面中位に入。
第10回 16	11	土層⑥	砕・器台	受8.6 高15.2 底12.85	におい黄褐色	やや粗 径2mm以下の砂粒をや や多く含む	良	受・端、底・端337+ 体・内 上位、下位は下+、中位は3 37+後板状工具下+ 体・外下+	体部外面下位に黒炭。
第10回 17	11	土層⑥	砕・器台	受9.5 高15.4 底13.2	内褐色～淡黄褐色 外におい褐色	やや粗 径2mm以下の砂粒をや や多く含む	良	受・端、底・端337+ 体・内 上位、下位は下+、中位は 下+後板状工具下+ 体・外下+	体部内面下半に黒炭。
第10回 18	11	土層⑥	砕・器台	受8.75 高15.8 底12.6	内におい褐色 外におい黄褐色	やや粗 径3mm以下の砂粒をや や多く含む	良	受・端、底・端337+ 体・内 上位、下位は下+、中位は 下+後板状工具下+ 体・外下+	
第10回 19	12	土層⑦	砕・広口壺	口34.1 残存高13.85 胴部径(17.8)	内におい褐色～淡 黄褐色 外におい褐色	やや粗 径13mm以下の砂粒を やや多く含む	良	胴・内 上位は337+後板状工具下+ 胴・外 下+後337+ 他は337+	口縁部・胴部外面～体部 外面に黒色顔料。
第10回 20	12	土層⑦	砕・広口壺	残存高22.1 体28.55 底7.1	におい褐色～におい 褐色	やや粗 径2mm以下の砂粒をや や多く含む	良	体・内 上位～中位は板状工具下+ 上位は下+、下位は下+ 体・外 下+、底337+ 底下+	黒色顔料土器。 体部外面中位～体部と底 部の境付近に黒炭。
第10回 21	-	下層	砕・蓋	天4.8 高8.35 口37.4	内におい褐色 外褐色～におい褐色	やや粗 径3mm以下の砂粒をや や多く含む	良	天・内下+ 天・外 器裏摩滅のため調整不明 体・内 上半は板状工具下+、下半 は337+ 体・外 板状工具下+後一部+337+ 口337+	口縁部に黒炭。
第10回 22	-	上層西半	砕・無顕蓋	残存高3.2	内におい褐色 外褐色	やや粗 径2mm以下の砂粒をや や多く含む	良	器裏摩滅のため調整不明	SK3上層東半出土と接 合。
第10回 23	12	下層	砕・短頸壺	口20.9 残存高5.1	内におい褐色 外におい褐色～ い褐色	やや粗 径3mm以下の砂粒をや や多く含む	良	胴・内+337+ 他は337+	黒色顔料土器。 胴部外面に黒文。 口縁部外面に黒文。
第10回 24	12	上層西半	砕・広口壺	残存高6.0	内におい黄褐色 外淡黄褐色～におい 黄褐色	やや粗 径3mm以下の砂粒をや や多く含む	良	口337+、上腹面は板状工具下+ 他は板状工具下+	口縁部上腹面に黒炭、胴 部に刻目。 胴部外面に黒文。
第13回 1	12	上層	砕・壁粒	天3.7 高43.1 口33.75	内褐色 外褐色～におい褐色	やや粗 径3mm以下の砂粒をや や多く含む	良	天・外下+ 体・内 下半は下+ 体・外下+ 口、突337+ 他は器裏摩滅のため調整不明	体部内面中位に337+。 体部外面中位～中位に入。
第13回 2	12	下層	砕・壁粒	口29.0 高45.3 底8.35	内におい褐色～ い黄褐色 外におい褐色	やや粗 径3mm以下の砂粒をや や多く含む	良	口、突337+ 体・内 板状工具下+ 体・外下+ 底下+	体部内面下位に黒炭。 体部外面中位～下位に入。 底面外面に種子 圧痕(中心のみの)。

棟号 番号	図版 番号	出土遺構	種類	法量 cm ³ g (復元値)	石材等	備考
第14図 1	13	SK03 上層西半	石造丁	長4.9 幅(7.1) 厚0.7 重37.8	新野川砂 ンプレース	両面とし中央部は粗研磨面を致す
第14図 2	13	SC01 上層西半	石造丁	長6.15 幅(10.9) 厚0.45 重58.5	新野川砂 ンプレース	両面は粗研磨面を 施すため、刃の縁部が不鮮明
第14図 3	13	SK03 下層	小形礎石	長(2.8) 幅1.4 厚1.25 重8.8	石原産石	研面4面
第14図 4	13	SC01 床面直上 東半	小形礎石	長(3.1) 幅(2.55) 厚0.9 重10.6	石原産石	表面は研磨なし、側面に掘り切り痕跡あり、側面に黒色付着物あり
第14図 5	12	SC03 下層	土製投擲	長(3.6) 幅2.75 厚(2.35) 重20.8	—	ラグビーボール状
第14図 6	12	SC04 下層	土製投擲	長3.8 幅2.15 厚(2.15) 重13.6	—	ラグビーボール状
第14図 7	13	SC03 SK01	定厚片	長(5.7) 幅(7.1) 最大厚3.7 重78.0	—	SC03PESN01、SC03指平、上層ベルトと接合 面線圧痕が窺い見える
第14図 8	14	SC01 床面付込	ガラス小玉	長0.355 幅0.367 厚0.232 重0.1	ガラス	
第14図 9	14	SC02 床面付込	ガラス小玉	長0.351 幅0.359 厚0.371 重0.1	ガラス	
第14図 10	14	SC03 床面付込	ガラス小玉	長0.338 幅0.37 厚0.173 重0.1	ガラス	
第14図 11	14	SC04 床面付込	ガラス小玉	長0.305 幅0.284 厚0.211 重0.1	ガラス	
第14図 12	14	SC05 床面付込	ガラス小玉	長0.352 幅0.346 厚0.22 重0.1	ガラス	
第14図 13	14-15	SC03 床面	納付 鉄ヤリガンテ	長(4.7) 幅2.1 厚(1.3) 重10.8	—	跡治鉄所再加工品

図 版 表 紙



発掘作業風景（大原小学生見学）

図版 1



小郡若山遺跡9調査区全景（上空から）



小郡若山遺跡9調査区全景（北上空から）



小郡若山遺跡9調査区付近（上空から）



調査地から小郡官衙遺跡公園を望む（南東方向）

図版 3



① 1号住居跡土層断面（南西から）



② 1号住居跡土層断面（南東から）



③ 1号住居跡中央土坑土層断面（南東から）



④ 1号住居跡焼土横土坑土層断面（西から）



⑤ 1号住居跡屋内土坑土層断面（北東から）



⑥ 1号住居跡屋内土坑土器出土状況（北から）



⑦ 1号住居跡ガラス小玉①出土状況（東から）



⑧ 1号住居跡ガラス小玉③④出土状況（東から）



① 1号住居跡（北西から）



② 1号住居跡西側ベッド状遺構（北西から）



③ 1号住居跡西側ベッド状遺構（南東から）



④ 西側ベッド状遺構土器出土状況（北から）



⑤ 1号住居跡東側ベッド状遺構（西から）



⑥ 1号住居跡床面検出状況（南東から）



⑦ 1号住居跡完掘状況（北西から）



⑧ 1・3・4号住居跡（北東から）

図版 5



① 3号住居跡土層断面（北西から）



② 3号住居跡（西から）



③ 3・4号住居跡の先後関係（北東から）



④ 北西側遺物出土状況（南から）



⑤ 鉄ヤリガンナ出土状況（南から）



⑥ 4号住居跡土層断面（南西から）



⑦ 1・3号住居跡の先後関係（北東から）



⑧ 3・4号住居跡の先後関係（東から）



① 1号土坑土層断面 (東から)



② 2号土坑土層断面 (北西から)



③ 2号土坑遺物出土状況 (東から)



④ 2号土坑遺物出土状況 (南西から)



⑤ 3号土坑土層断面 (南東から)



⑥ 3号土坑遺物出土状況 1 (南から)



⑦ 3号土坑遺物出土状況 2 (南西から)



⑧ 3号土坑遺物出土状況 3 (北西から)

図版 7



① 1号甕棺土層断面（南東から）



② 目貼り粘土土層断面（南東から）



③ 1号甕棺検出状況（南東から）



④ 目貼り粘土詳細（南東から）



⑤ 1号甕棺検出状況（南から）



⑥ 1号甕棺下莞立割状況（南東から）



⑦ 1号甕棺上下棺検出状況（南から）



⑧ 1号甕棺内部状況（南東から）



① 1号掘立柱建物（北西から）



② 1号掘立柱建物（北東から）



③ S B 01 p 1 土層断面（西から）



④ S B 01 p 2 土層断面（南西から）



⑤ S B 01 p 3 土層断面（北東から）



⑥ S B 01 p 4 土層断面（北東から）



⑦ S B 01 p 5 土層断面（南東から）



⑧ S B 01 p 6 土層断面（北から）

図版 9



①SB 01 p 7 土層断面 (東から)



②SB 01 p 8 土層断面 (南東から)



③SB 01 p 9 土層断面 (南東から)



④SA 01 p 1 土層断面 (南から)



⑤SA 01 p 2 土層断面 (北から)



⑥SA 02 p 1 土層断面 (西から)



⑦SA 02 p 2 土層断面 (西から)



⑧SA 02 p 3 土層断面 (西から)



SC01 (5-2)



SC01 (5-4)



SC01 (5-3)



SC01 (5-2)



SC02 (5-7)



SC02 (5-11)



SC03 (5-14)



SC01 (5-4)



SC01 (5-3)



SK02 (7-1)



SK02 (7-7)



SK02 (7-16)



SK02 (7-18)



SK02 (7-19)



SK02 (7-14)

图版 11



S K 02 (7 - 15)



S K 02 (8 - 19)



S K 02 (8 - 19)



S K 02 (8 - 20)



S K 02 (8 - 21)



S K 03 (10 - 1)



S K 03 (10 - 2)



S K 03 (10 - 11)



S K 03 (11 - 21)



S K 03 (10 - 16)



S K 03 (10 - 17)



S K 03 (10 - 18)



S K 03 (10 - 13)



S K 03 (10 - 12)



S K 03 (10 - 14)



S K 03 (10-15)



S K 03 (11-19)



S K 03 (11-20)



S K 03 (11-23)



S K 03 (11-24)



S T 01 上



S T 01 F



S K 03 (10-7)



S B 01

S C 04 (14-6)

S C 03 (14-5)

图版 13



SC 03 (14-7)



SC 01 (14-2)

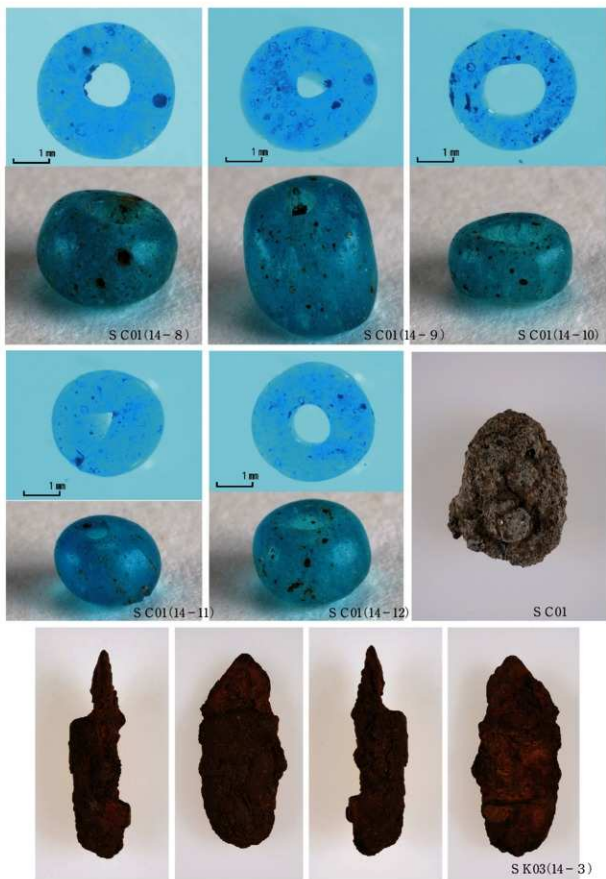
SK 03 (14-1)



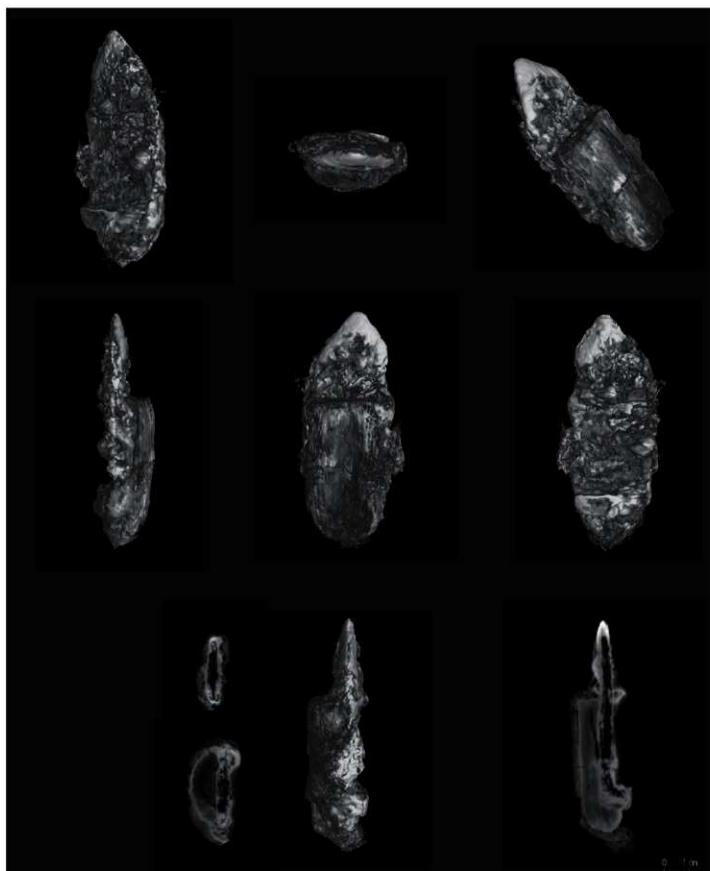
SC 01 (14-4)

SC 01 (14-3)

ST 01



図版 15



柄付き鉄製ヤガシ X線 CT 画像 (S C 03 出土)

報告書抄録

ふりがな	おごおりわかやまいせき							
書名	小郡若山遺跡 9							
副書名								
巻次								
シリーズ名	小郡市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 344 集							
編著者名	山崎 頼人							
編集機関	小郡市教育委員会 小郡市埋蔵文化財調査センター							
所在位置	〒838-0106 福岡県小郡市三沢 5147-3 Ⅱ0942-75-7555							
発行年月日	令和 4 年 3 月 31 日							
ふりがな 所収遺跡名	しよざい 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おごおりわかやま 小郡若山 いせき 遺跡 9	ふくおかけん 福岡県 おごおりし 小郡市 おごおり 小郡	40216		33° 40′ 24″	130° 55′ 48″	20191224 ～ 20200228	152 m ²	個人住宅 建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
小郡若山 遺跡 9	集落	弥生 奈良		竪穴住居・掘立柱 建物・祭祀土坑・ 周溝状遺構 掘立柱建物・土坑		弥生土器・石器・土製 品・鉄器・ガラス製品 土師器・須恵器		柄付き鉄製 ナベの出土
<p>本遺跡はこれまでに 8 回の調査を実施している。小郡官衙遺跡に近接しており、本調査でも奈良時代の建物跡 1 軒等を確認した。主軸方向から小郡官衙遺跡第Ⅱ期と同時期と考えられる 2×2 間の総柱建物である。弥生時代の集落では、中期集落だけでなく、後期の集落も確認でき、小郡・大板井遺跡群の後期環濠集落の南東方向への広がりを確認できた調査となった。</p>								

小郡若山遺跡 9

小郡市埋蔵文化財調査報告書第 342 集

令和 4 年 3 月 31 日

発行 小郡市教育委員会

小郡市小郡 255-1

出版 片山印刷（有）

小郡市紙園 1 丁目 8-15